人間文化研究機構地域研究推進事業
「現代インド地域研究」

RINDAS
The Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University
龍谷大学現代インド研究センター

RINDAS 伝統思想シリーズ 4

Dharma, the Personified

原　　実

龍谷大学
Ryukoku University

龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター・現代インド研究センター
The Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University

研究テーマ：「現代政治に活きるインド思想の伝統」

The Living Tradition of Indian Philosophy in Contemporary India

現代インドのイメージは、かつての「停滞と貧困のインド」、「悠久のインド」から、「発展するインド」へと様変わりした。激変する経済状況を支えたのは、相対的に安定したインドの「民主主義」政治である。興味深いことに、現代政治・経済を支える人々の行動規範や道徳観の根底には、「民主主義」などと並んで、サティヤ（真実／真理）、ダルマ（道徳性／義務）、アヒンサー（非暴力）など、長い歴史に培われてきたインドの思想やその世界観が横たわっている。

本プロジェクトでは、龍谷大学が創立以来 370 年に渡って蓄積してきた仏教を中心としたインド思想研究に関する知識と史資料を活かし、近年本学において活発化している現代インド研究を結合させる。「現代政治に活きるインド思想の伝統」というテーマにもとづき、下記のように二つの研究ユニットを設けて現代インド地域研究を推進し、プロジェクト活動を通じて、次世代を担う若手研究者の育成を図っていく。

研究ユニット 1「現代インドの政治経済と思想」

研究ユニット 2「現代インドの社会運動における越境」

RINDAS 伝統思想シリーズ 4

Dharma, the Personified

原　　実

Dharma, the Personified

原　　実

ヒンヅー教や仏教に在って、重要な概念の一つに Dharma がある事は周知の事実である。その重要性の故に多くの論稿がこれまで書かれて来ているのでそれらに新たに書き加える事は至難の業である。従って今回は資料を叙事詩に限って、それが人格化された姿を論じる事とした[1]。

(1)　序論

(1-1) 神話伝説に充ちた古代インドの文学に於いては、当然の事ながら神々の擬人化が進んでいる。擬人化は神々や、抽象概念を戯曲の舞台に登場せしめて、互いに角逐せしめる所謂 allegorical plays (*Śārīputra-prakaraṇa, Prabodha-candrodaya, etc.) に究極するが、神話や伝説に見える神々の擬人化は幾つかの範疇に分類され得る。その中の或るものは神々自身の間の関係を描き、又或るものは神々とその宿敵アスラとの闘争を描き、更に他のものは神人間の関係を物語る。神と人間の物語の中で最も顕著なものは、神が己が信者の献身的修行によって満足し、その夢枕に立って願い事を聞き、それを叶えるという所謂 *vara* のモチーフであるが、他面神が自在に変装して人間や動物の形を取って現れ、しばしば人間を当惑させるモチーフも叙事詩に繰り返される。その中で最も有名なものは、ナラ王物語に見えるヒロイン Damayantī の婿選び (*svayaṃvara*) に於けるもので、彼女がそれに参加したナラ王を自選しようとした時、Indra, Agni, Varuṇa, Yama の 四神 (*loka-pāla*) が、ナラ王と同じ形を取ってそこに参列したから、彼女はこの 5 人の同形の男性の中で、どれが本当のナラ王なのか思案に暮れる。併し、彼女の「真実語 (*satya-vacana*)」の誓、呪願の力によって 4 人の神々は「神の徴票」(*deva-liṅga*) である、発汗せぬ事、その眼が瞬きせぬ事、持っている花輪が凋まない事、影のない事、足が地についていない事の、計五つの特徴[2]を顕して彼女の急を救った。「変幻自在」「自在変身」は神格化された Dharma の場合も例外ではないが、Dharma の場合にはその倫理的性格を反映して「人間を試す (*jijñāsārtha*)」要素が就中顕著となっている。

(1-2) インドに知られる「捨身物語」の中でも就中有名なものは、鷹に追われた鳩が、王の許へ保護を求める有名な「シヴィ王物語」であるが、これは伝承形態によって必ずしも同一ではない。以下に KSS の伝承によるものを引用するが、ここで鷹は Indra に、鳩は Dharma に変容している。

taṃ vañcayitum indro 'tha kṛtvāśyena-vapuḥ svayam
māyā-kapota-vapuṣaṃ dharmam anvapatad drutam (*KSS.7.89*)
彼を試す為に、Indra は自ら鷹の姿を取り、
仮に鳩の姿を取った Dharma を急ぎ追跡した。

鳩は王の膝元に至って庇護を乞うと、王は彼に「無畏」(*abhaya*) を約した。追跡して来た鷹は、自分

の食を奪うことは不法であると王をなじるが、王は「無畏の誓」を棄てようとしない。そして鳩の替りとして、別の食を与えようと申出ると、鷹がここで王自身の肉を求める。すると王は直ちに応諾して、鳩を秤の一方の皿に、自分の肉を切り刻んではもう一方の皿に載せるが、載せても載せても鳩の肉と等量にならない。そこで遂に彼は自から秤の上に乗って「捨身」の慈悲行を実践する。ここに二人の神は「正体」を顕して王の行為を褒め称えた。

indra-dharmau tatas tyaktvārūpaṃ śyena-kapotayoḥ
tuṣṭāv akṣata-dehaṃ taṃ rājānaṃ cakratuḥ śibim（*98*）
dattvācāsmai varān anyāṃs tāv antardhānam īyatuḥ（*KSS.7.97a*）
すると Indra と Dharma は、鷹と鳩の姿を棄て、
満足してシビ王をもとの無傷の身体にし、
彼に *vara* を与えて、二神とも姿を消した。

この物語で知られる様に、Dharma は帝釈天と共に王の慈悲行を試したのであった。
同様の試練物語（*jijñāsamāna*）は MBh 3.131 にも語られるが、そこでは鷹は Indra 、鳩は Agni となっている[3]。

上の物語に於いて、人間を「試す」側の神は二人とされるが、叙事詩に在って Dharma は時に一人、時に三人、又時に四人と共に顕われる。以下にそれらを逐一検討して行きたいと考えるが、先立って我々は抽象概念である Dharma が「姿、形を取る」と言う表現一般に言及する必要があるであろう。

（1-3）*dharmo vigrahavān iva*　徳高く、理想的な王を讃える文脈に在って、しばしば比喩的にこの王を描いて「Dharma が化身した者の如く」（*dharmo vigrahavān iva*）であったと言われる。
Janamejaya の問いに答え、吟遊詩人は Parikṣit 王を讃えて次の様に言う。

cātur-varṇyaṃ svadharma-sthaṃ sa kṛtvāparyarakṣata
dharmato dharmavid rājādharmo vigrahavān iva（*MBh.1.45.7*）
その法を知る王は、四姓より成る社会の人々を各自その本務に付かせ、
法に則って守護した。彼はまさに法そのものが化身した如くであった。、

即位式前の沐浴に赴く Yudhiṣṭhira を描いて言う。

bhrātr.bhir jñātibhiścaiva suhṛdbhiḥ sacivais tathā
kṣatriyaiśca manuṣyendra nānā-deśa-samāgataiḥ
amātyaiśca nṛpa-śreṣṭho dharmo vigrahavān iva（*MBh.2.30.45*）
弟達、親族友人、同僚、諸国から集まって来た王達、
大臣に取囲まれて、王の中の最たる者は、恰も法が姿を取った如くであった。

バラモン達は、Arjuna の激しい苦行を語って、兄 Yudhiṣṭhira に言う。

yathādhanaṃjayaḥ pārthas tapasvīniyata-vrataḥ

munir eka-caraḥ śrīmān dharmo vigrahavān iva（*MBh.3.78.21*）
Pṛthā 夫人の子、Arjuna は苦行者となって、誓戒に忠実に、
（森の中に）独り行くムニとなったが、彼は恰も高貴な法が化身した如くである。

（2）Dharma の擬人化

上の序論を踏まえた上で以下本論に入るが、これまで筆者の集め得た用例は十例に留まり、その中には長文に亘るものも幾つか存在する。併しながら、仔細に検討してしてみるとそれらは大別して、主人公 Dharma が権威を以って登場するものと、そうでないものとの二つのグループに分類される。以下にそれらを順を追って検討していくであろう。

（2-1）MBh.18.3.（*vigrahavān sākṣāt*）
叙事詩の最終巻は Svargārohaṇa-parvan（昇天の巻）と名付けられて、そこには Yudhiṣṭhira の昇天物語が語られている。併し天界に行ってみると、そこには宿敵 Duryodhana が既にそこの住人となっていた。驚いた彼は宿敵と同席するのを潔しとせず、寧ろ弟達の居る所に行きたいという。これを見て Nārada は既に天国に来た者は皆清浄であるから、今更地上の恨みを抱いてはならないと諭すが、それでも尚彼は親族友人に会いたいと言う（18.1）。その中でも彼は就中、それとは知らずに地上で雌雄を決した Karṇa に会って、彼を慰めたいと言い、他に兄弟の名を挙げて彼等なしで天国に留まる事を敢えて辞退する（18.2.12）。すると神々は、使者（*deva-dūta*）に命じて親族の居る所に彼を案内させる。二人は臭気紛々たる熱湯の川を渡り、剣の森を通って行ったが、彼はこの地獄の苦痛に何とも耐えられず、引き返したいと神々の使者に申出る。彼が踵を返して帰ろうとすると、「汝がいると一瞬でも気持よくなるから、どうか暫くここに留まってくれ」と暗がりより声あり、誰かと思ってよく見ると、彼等は Karṇa を初めとする親族同胞であった。彼はどうして彼等が地獄で苦しんでいるのかと訝るが、兎も角彼はここに留まる事を決心して使者に告げて言う。

sa tīvra-gandha-saṃtapto deva-dūtam uvāca ha
gamyatāṃ bhadra yeṣāṃ tvaṃ dūtas teṣām upāntikam（*51*）
na hy ahaṃ tatra yāsyāmi sthito 'smīti nivedyatām
mat-saṃśrayād ime dūta sukhino bhrātaro hi me（*MBh.18.2.52*）
極度の悪臭に悩まされつつ、彼は神々の使者に告げて言った。
「汝を使いに遣した神々の所に行って、
私はここに留まって決して帰らないと告げてくれ。
私がここに居る事によって、我が兄弟は安楽となるから」

使者は帰って神々に彼の意向を伝えると、程なく Dharma が自ら姿をとって、帝釈天以下の神々と共に彼に会いにやって来た。（*svayaṃ vigrahavān dharmo rājānaṃ prasamīkṣitum*: MBh.18.3.2ab）。すると忽ちそれまでの地獄の様は一変して、凡てが心地よくなり、神々、聖仙達が彼の許に集まった。帝釈天は彼に、凡ての死者は最初先ず地獄に至って罪を清め、それから次に天国に赴く事になっているのだと語る。それ故、今は既に彼の兄弟同胞は悉く天国に在って幸せに過ごしていると告げる。

evaṃ bruvati devendre kauravendraṃ yudhiṣṭhiram
dharmo vigrahavān sākṣāt uvāca sutam ātmanaḥ（*28*）
bho bho rājan mahāprājña prīto 'smi tava putraka
mad-bhaktyāsatyavākyena kṣamayāca damena ca（*MBh.18.3.29*）
斯くの如く、神々の長 Indra が Kuru の長 Yudhiṣṭhira に言っていると、
Dharma は目の当り自分の姿を現して、（自分の）息子に向って次の様に言った。
「賢明なる王よ、余は満足（*prīta*）した。汝の
余への献身的愛、真実語、忍耐と自制心とによって」

Dharma は更に続けて言う。

eṣātṛtīyājijñāsātava rājan kṛtāmayā
na śakyase cālayituṃ svabhāvāt pārtha hetubhiḥ（*30*）
pūrvaṃ parīkṣito hi tvam āsīd dvaitavanaṃ prati
araṇī-sahitasyārthe tac ca nistīrṇavān asi（*31*）
sodaryeṣu vinaṣṭeṣu draupadyāṃ tatra bhārata
śva-rūpa-dhāriṇāputra punas tvaṃ me parīkṣitaḥ（*32*）
iha tṛtīyaṃ bhrātṛṇām arthe yat sthātum icchasi
viśuddho 'si mahābhāga sukhīvigata-kalmaṣaḥ（*MBh.18.3.33*）
これは余が汝に為したる三回目の試練である。
汝は諸々の誘因（*hetu*）によって、自らの本性から動かされる事はなかった。
以前、引火木接合に事寄せて、Dvaita の森で試されたが、汝はそれを通過した。
又、余は兄弟と Draupadī が斃れた時、犬の姿を取って再度汝を試した事がある。
今回は三回目であるが、ここで汝は兄弟の為なら、敢えてここに留まろうと欲している。
偉大なる者よ、汝は実に清浄にして、安穏、穢れなき者である[4]。

ここに、我々は Dharma が Yudhiṣṭhira を地獄に落したのは、第三回目の試練（*jijñāsā*）であると言い、第一回目は Dvaitavana に於けるもの、第二回目は自身が犬の姿を取った時であると告げているのを見るが、以下に先ずこれら第一、第二の試練である Dvaitavana の故事と、犬の物語を検討するであろう。

（2-2）MBh.3.295-299（*ānṛśaṃsya*）（異母弟優先）（夜叉）

第一の試練物語は、叙事詩の第三巻に語られる。それによると、五王子が Dvaita の森に憩っていた時、彼等は激しい喉の渇きに悩まされた。そこで彼等は先ず末弟 Sahadeva に命じて、近くの木に登って近隣に池がないかを確かめさせた。木の上から池を見つけた彼は、直ちに水を取りに行くが、この池はもと夜叉の所有するところであったから、夜叉は己が姿を現して、無断で彼が水を飲んでいるのを咎めた。併し余りの渇きに悩まされていた彼は、それを無視して池の水を飲むと、途端に彼はその場に斃れた。末弟が何時になっても帰還しないので、長兄は次に Nakula を池に遣わしたが、彼も弟を同様の運命を辿った。続いて Arjuna 、次に Bhīma を遣わしたが、彼等も同じ運命を辿らねばならなかった。最後に長兄自身が池に赴いてみると、四人の弟が夜叉の池に斃れているのを見つけた。悲嘆の余り、彼は死を決して池に飛び込んだが、折から天より声あり、夜叉が現れて Yudhiṣṭhira に次々と 34 の質問を

浴びせたが、彼はその凡てに解答したから、満足した夜叉は、四人の中から誰か一人を蘇生させて進ぜようと言う。斯く一人選択を迫った時、彼は夜叉の期待に反して、Bhīma と Arjuna という二人の実弟を措いて、敢えて異母弟（*sāpatna*）である Nakula を選んだから、不審に思った夜叉は彼に訊ねた。

priyas te bhīmaseno 'yam arjuno vaḥ parāyaṇam
sa kasmān nakulaṃ rājan sāpatnaṃ jīvam icchasi（*MBh.3.297.67*）
Bhīmasena は汝の愛しき（弟）、Arjuna は汝等兄弟の拠り所であるのに、
事もあろうに汝は、何故異母弟 Nakula を蘇生させたいと思うのか。

ここに梵語 *sāpatna* は「同じ夫を持つ、恋敵の女 *sa-patnī* 」に由来する語で、文字通り「異母弟」ではあるが、より一般的には「宿怨に基づく敵対者」の義に用いられるから、実弟をさし措いて、敢えてこの異母弟を選んだのを夜叉は不審に思ったのである。これに対して彼は応えて言う。

ānṛśaṃsyaṃ paro dharmaḥ paramārthāc ca me matam
ānṛśaṃsyaṃ cikīrṣāmi nakulo yakṣa jīvatu（*71*）
yathākuntītathāmādrīviśeṣo nāsti me tayoḥ
mātṛbhyāṃ samam icchāmi nakulo yakṣa jīvatu（*MBh.3.297.73*）
事の真実より見れば、義理人情（を重んずる事）は人間最高の義務なりと余は思う。
余は義理人情を全うせんとす。されば夜叉よ、Nakula を蘇生せしめよ。
（実母）Kuntī と、（異母）Mādrī は、余にとり両者の間に差別なし。
二人の母に対して余は平等ならんと欲す。されば夜叉よ、Nakula を蘇生せしめよ。

それを聞いた夜叉は、彼の弟全べてを蘇生せしめた。それを見た時 Yudhiṣṭhira は夜叉にその正体を訊ねると、彼は仮装を解き、実は自分は Dharma であると彼に告げ、彼を祝福して次の様に言う。

yaśaḥ satyaṃ damaḥ śaucam ārjavaṃ hrīr acāpalam
dānaṃ tapo brahmacaryam ity etās tanavo mama（*7*）
ahiṃsāsamatāśāntis tapaḥ śaucam amatsaraḥ
dvārāṇy etāni me viddhi priyo hy asi sadāmama（*MBh.3.298.8*）
栄誉、真実、自制、清浄、廉直、廉恥、冷静、布施、苦行、梵行（の十）は我が身体。
不殺生、公平、寂静、苦行、清浄、無私、これら（の六）は我が門と知れ。余は常に汝を愛す。
ここに Dharma の十体（*tanu*）、六門（*dvāra*）が説かれている[5]。

（2-3）MBh.17.3（忠犬保護）（犬）

叙事詩の第十六巻は Mausala-parvan と名付けられ、そこには Kṛṣṇa の死が語られるが、続く第十七巻 Mahā-prasthāna parvan には、残された五王子とその妻の大遷が物語られる。世を儚んだ Yudhiṣṭhira は Arjuna の孫 Parikṣit に王位を譲り、財産を全てバラモンに布施し、人々に別れを告げて弟達と妻、それに一尾の犬を伴って聖地巡礼の旅に出発した（MBh.17.1）。

彼等は先ず北方に進路をとり、雪山を越え、須弥山を仰いで進み行く間に、貞女 Draupadī が突然神通力を失って（*bhraṣṭa-yoga*）地上に斃れた。それを見た次兄 Bhīma は、長兄に「品行方正でだった（*nādharmaścaritaḥ kaścid*）彼女が何故に斃れたのであるか」とその理由を訊ねると、長兄は彼女が

「Arjuna を偏愛（*pakṣa-pāta*）した」故であると答えるまま、彼女に振返る事も無く只管前進して行った。すると今度は末弟 Sahadeva が大地に斃れた。次兄は再び長兄に「無私無欲のまま只管長上に奉仕した（*śuśrūṣur anahaṃkṛta*）末弟が何故に斃れたのか」と訊ねると、兄は彼の「知性（*prajñā*）への驕り」が原因であると答えて、更に前進した。すると今度は Draupadī と Sahadeva の両人の死を悼んだ Nakula が斃れた。再び兄弟の間に質疑が交わされ、彼の場合は「美貌（*rūpa*）への驕り」の故とされる。次いで斃れたのは Arjuna であったが、彼の場合は「勇猛への驕り（*śūra-mānin*）、彼が戦場で総て他の武士を侮った結果」であるとされた。すると今度は次兄 Bhīma 自身が斃れた。彼は今際の際に兄に理由を訊ねると、兄は「過食（*atibhukta*）」の故であると答えた。斯くて最期に一人になった Yudhiṣṭhira は、斃れた弟達を顧慮する事も無く唯一人、犬を伴って歩み続けていると（MBh.17.2）、ここに帝釈天が車を伴って彼の前に現れ、急ぎこれに乗るように勧めるが、彼は帝釈天に向って次の様に言う。

bhrātaraḥ patitāme 'tra āgaccheyur mayāsaha
na vinābhrātṛbhiḥ svargam icche gantuṃ sureśvara（*3*）
sukumāarīsukhārhāca rājaputrīpuraṃdara
sāsmābhiḥ saha gaccheta tad bhavān anumanyatām（*MBh.17.3.4*）
余の弟達はここに斃れている。彼等は余と共に行かねばならぬ。
余は弟達と一緒でなければ、仮令天国といえども、行く事は出来ない。
四肢麗しき王女は幸せを享くるに値する女である。
彼女は我々と共に行かねばならぬ。帝釈天よ、何卒この点を諒承し給え。

すると帝釈天は彼等は人身（*mānuṣa deha*）を棄てて既に天国（*svarga*）に行っているから、彼等を案ずるに及ばない。でも汝はこの人身（*śarīra*）を具えたまま天国に行く事が出来るから、早くこの車に乗るように勧める。これに対して彼は答える。

ayaṃ śvābhūta-bhavyeśa bhakto māṃ nityam eva ha
sa gaccheta mayāsārdham ānṛśaṃsyāhi me matiḥ（*MBh.17.3.7*）
過去未来を見統なわす神よ、これなる犬は常に余に従う忠犬なれば、
彼は余と共に行かねばならぬ、何となれば我が心は義理人情を尊しとなせば。

これに対し帝釈天は、既に汝は我等神々と同様に、不死性を己が手中に収めているのだから、犬など棄ててしまえ、そんな者に義理人情を感じる必要などないと言ってしきりに天国行きを勧める。併し、彼は忠臣（*bhakta-jana*）を棄てて得られる様な幸せ（*śrī*）ならば、そんなものは要らないと言って、帝釈天の誘いを突っぱねる。これに対し帝釈天は、天国には犬を連れて来る者に座（*dhiṣṇya*）はない。それどころか、犬を連れて天国に来れば、彼のこの世で為した善行の果まで羅刹 Krodhavaśa 達が掠奪してしまうから、そこをよくよく考えてこの犬を棄てる様、重ねて忠告する。これに対して彼は言う。

bhakta-tyāgaṃ prāhur atyanta-pāpaṃ tulyaṃ loke brahma-vadhyākṛtena
tasmān nāhaṃ jātu kathaṃ canādya tyakṣyāmy enaṃ sva-sukhārthīmahendra（*MBh..17.3.13*）
信愛を捧げる者を棄てる事は最悪の罪、バラモン殺し（の罪）にも匹敵する。
それ故、余は、自分だけの幸せを求めて、今ここに彼を棄てる様な事は絶対に出来ない。

これに対して帝釈天は更に「犬の不浄性」を説いて、「犬の眼に入ったものは、布施でも、祭式でも総て無効となる」と言う。そして更に、汝は既に最愛の弟や妻も棄てているのに、如何してこんな犬を棄てる事が出来ないと言うのかと彼に詰め寄る。彼は答えて言う。

na vidyate saṃdhir athāpi vigraho mṛtair martyair iti lokeṣu niṣṭhā
na te mayājīvayituṃ hi śakyātasmāt tyāgas teṣu kṛto na jīvatām（*14*）
pratipradānaṃ śaraṇāgatasya striyo vadho brāhmaṇa-svāpahāraḥ
mitra-drohas tāni cātvāri śakra bhakta-tyāgaścaiva samo mato me（*MBh.17.3.15*）
死んでしまった人間とは、邂逅も別離もないとは、世間周知の事実である。
さりとて彼等を甦らせる事も出来ないから、余は彼等（兄弟）を棄てたが、
生きている者に対しては、そうは行かない。
助けを求めて来た者を突き帰す事、女を殺す事、バラモンの財を奪う事、友を欺く事、
この四つと、忠臣を棄てる事（*bhakta-tyāga*）とは、等しいものと余は思う。

この言を聞いた直後に、犬は Dharma に変じて、彼を心から讃えた。ここでも Dharma は、往時 Dvaitavana に於いて夜叉となって彼を試した故事に言及している（*purādvaita-vane cāsi mayāputra parīkṣitaḥ*: MBh.17.3.18-19）から、叙事詩の編纂者は既にこの段階で、この「犬変装場面」を第二の試練として知っていた事が判明する。

以上、我々は Dharma が自ら語る「三つの試練」物語を明らかにして来たが、以下にそれ以外の一般的文脈に於ける「Dharma の変身物語」を検討して行くであろう。

（2-4）Sudarśanopākhyāna（家長期義務遂行 = svadharma）（バラモン）

別名を Mṛtyuṃ-jaye sudarśanopākhyāna とも呼ばれるこの物語は、MBh.13.2 に語られる。

Kurukṣetra に住む Agni の子 Sudarśana は、Oghavat 王の娘 Oghavatī を娶って幸福な家長期を送っていたが、彼は同時に現在の生活形態（*gṛha-stha*）を続けるまま「死に打克つ」（*mṛtyuṃ-jaya*）誓を立てていた[6]。彼は日頃から妻にも、家長期の義務（*gṛhastha-dharma*）である「客人款待（*ātithya, atithi-pūjā*）」を励行するように説いていた。

ところが或る日、彼が森に薪を採りに出掛けていた留守中に、一人のバラモン行者が彼の家に物乞いに現れた。夫の不在中ではあったが、妻は日頃の夫の命令を貴しとして、この客人に何不足無きよう最善の努力をして只管「客人歓待」の義務を以って彼に奉仕していた。然るにこのバラモンは、請いが次々に受け容れられるまま、遂に彼女の「身体」を求むるに及んだ。彼は言う。

yadi pramāṇaṃ dharmas te gṛhasthāśrama-saṃmataḥ
pradānenātmano rājñi kartum arhasi me priyam（*53*）
若し、汝が家長期に定められた法を貴しとする（*pramāṇa*）ならば、王女よ、
自らの身体を与える事（*ātma-pradāna*）によって、余を歓ばせねばならない。

既述の様に、彼は「死神 Mṛtyu 克服」の誓いを立てていたから、死神の方も隙あらば、彼に打克たんと棍棒を手にして、常に彼の後を即けていた[7]。一方彼女は、他の物で客人を何とか満足させようと図ったが、彼は飽くまで彼女の肉体を要求した。ここに彼女は夫の日頃の言付けを想起して、これを受け

容れ、恥かしそうに（*lajjamānā*）彼に己が身体を委ねた。折しも夫の Sudarśana は、薪を集めて家に帰って来たが、その間も、例の死神が執拗に彼に付纏っていた。帰宅した彼は妻の名を呼んで何度も自らの帰宅を告げたが、何の返事も戻って来ない。かの客人バラモンが、彼女を口を塞いでいた故である。貞女が何時もの様に迎えに出て来ないのを不審に思った夫に、家の中からバラモンが次の様に答えて言った。

atithiṃ viddhi saṃprāptaṃ pāvake brāhmaṇaṃ ca mām（*63cd*）
anayāchandyamāno 'haṃ bhāryayātava sattama
tais tair atithi-satkārair ārjave 'syādṛḍhaṃ manaḥ（*64*）
余を（汝の留守中に）客人として訪れたバラモンと知れ。
余は、これなる汝の妻により、あれこれの客人歓待によって悦ばされている。
彼女の心は、まさに廉直に於いて堅固不動である。

この間にも、かの死神は、若し夫が自らの誓いを放棄したら、直ちにその場で斬殺してやろうと斧を掲げて身構えていた。

sudarśanas tu manasākarmaṇācakṣuṣāgirā
tyakterṣyas tyakta-manyuśca smayamāno 'bravīd itam（*67*）
surataṃ te 'stu viprāgrya prītir hi paramāmama
gṛhasthasya hi dharmo 'gryaḥ saṃprāptāatithi-pūjanam（*68*）
prānāhi mama dārāśca yac cānyad vidyate vasu
ātithibhyo maya deyam iti me vratam āhitam（*70*）
niḥsaṃdigdhaṃ mayāvākyam etat te samudāhṛtam
tenāhaṃ vipra satyena svayam ātmānam ālabhe（*71*）
併し、Sudarśana は心でも、行いでも、眼でも、声でも（凡てに亘って）
嫉妬心（*īrṣyā*）を棄て、怒り（*manyu*）を棄てていたから[8]、微笑みながら次の様に言った。（67）
「バラモン殿、何卒どうか性欲享受（*surata*）をお楽しみ下さい。これこそ我が最高の歓び。
蓋し、家長期の義務は、来訪した客人を歓待する事に究極すれば（68）
「我が命（*prāṇa*）、我が妻（*dārā*）のみならず、この家の洗いざらい、
凡ては余によって客人に提供さるべきものなり」とは余が誓。（70）
余はこの言葉を宣言す、疑いなし。バラモン殿、
この真実に賭け（*tena satyena*）、自らの命に賭けて、
余はこの言葉を宣したり、バラモン殿。疑い給う事なかれ」（71）

最終行の句は、しばしば「誓の文言」に繰返されるところであるが、後半に見える *svayam ātmānam ālabhe* の最後の *ālabh-* の語は、古く「動物屠殺」の文脈に現れる動詞で、文字通り「自分自身を屠殺する」、即ち「命に賭ける」義に他ならない[9]。

そして、彼はこの「真実宣言」が若し真（*satya*）であれば「守護」（*pālaya-*）を、偽（*anṛta, mithyā*）であればこの場での「焼殺」（*dah-*）あるようにと、天地神明に請うている（74）。するとこの宣言に応えて、八方より「こは真実なり、虚偽に非ず」の声が起こった。同時にこのバラモンは、己が姿を顕して彼に向かって次の様に言った。

dharmo 'ham asmi bhadraṃ te jijñāsārthaṃ tavānagha
prāptaḥ satyaṃ ca te jñātvāprītir me paramātvayi（*78*）
vijitaśca tvayāmṛtyur yo 'yaṃ tvām anugacchati
randhrānveṣītava sadātvayādhṛtyāvaśī-kṛtaḥ（*MBh.13.2.79*）
余は Dharma なり。芽出度し、余は汝を試さん為に（*jijñāsārtha*）来たれる者なり。
汝の真実（に悖る事なき）を知って、余はこの上なく満足した。
常に隙を覗って、汝の後を即けていたこの死神は、汝によりて克服せられたり。
汝の堅忍不抜により、彼は汝によりて服従せしめられたり。

この物語によって明かな様に、Dharma は客人バラモンに変装して人間を試し、その誓いの成就を祝福した。

（2-5）Nakulākhyāna（MBh.14.92-93 ＝貧者の一灯）

Pāṇḍu 五王子と Kuru 百王子の間に起こった所謂 MBh の大戦争は五王子の勝利に帰し、ここに Yudhiṣṭhira の即位式が行われ、盛大な Aśvamedha 祭が執行された。それも無事終了して、参加者一同が満足していた時、一匹の青い眼をして、身体の片側だけが金色の Nakula が穴から這い出して、人間の声をなし大声でこの大祭式を難詰、批判した。曰く。

saktu-prasthena vo nāyaṃ yajñas tulyo narādhipāḥ
uñccha-vṛtter vadānyasya kurukṣetra-nivāsinaḥ（*MBh.14.92.7 = 19*）
王達よ、これなる汝等の祭式は、Kurukṣetra に住み、物惜しみせず、
只管落穂を拾って生活する行者[10]の麦粉一升（*prastha*）にも値せぬ。

王やバラモン達は、この怪訝な Nakula の言を聞いて大いに驚き、彼にその難詰非難の理由を訊ねると、彼は笑いながら慎ましい「鳩の生活法（*kāpoti* ＝落穂拾い（*uñccha-vṛtti*）」を営んでいた老バラモンが、家族共々昇天（*svarga*）した物話を始めた。そしてこの老バラモン一家の昇天を目撃した時、自分の身体の半分が金色に変色したと付け加えた（92）。その物語の概要は以下の如くである。

この老バラモンは、第六時（*ṣaṣṭhe kāle*）[11]にのみ家族と共に食事（＝二日目の夕食）を摂る事にしていたが、或る時酷い飢饉に見舞われて、その僅かな食事さえもままならぬ事態となった。にも拘らず老バラモンは、炎天下に激しい苦行に身を委ねて勤め励んでいた。併し或る時、第六時に偶々麦一升（*yava-prastha*）が手に入ったので（9）、彼はそれを粉にして四等分し、各自はその四分の一升（*kuḍava*）を己が分け前として手にしていた（10）。この様にして彼等が食事をしていると、その場へ一人のバラモンが現れたので、彼等はこの客人（*atithi*）を歓び迎えた。父のバラモンは、自分の分け前であった一 *kuḍava* の麦粉を与えると、客は立ち所にそれを平らげたが、それでも尚彼は満足しなかった（16）。老バラモンが、どうしたものか思案していると、妻は「私の分を差し上げて」と申出た。併し、夫は妻の空腹疲弊を承知していたので、賛同する事なく次の様に言った。

api kīṭa-pataṅgānāṃ mṛgāṇāṃ caiva śobhane
striyo rakṣyāśca poṣyāśca naivaṃ tvaṃ vaktum arhasi（*21*）
anukampito naro nāryāpuṣṭo rakṣita eva ca
prapated yaśaso dīptān na ca lokān avāpnuyāt（*MBh.14.93.22*）

美しき者よ、虫や鳥の世界でも、女は守られ、食べさせられているのだから、
汝はそんな事を言ってはいけない。(21)
女に同情され、食べさせて貰って、守って貰う様な男は
輝かしい名誉を失い、天国にも到り得ない。(22)

これに答えて妻は夫婦は一心同体で、妻の一切は夫に依存していると主張して更に言う。

ṛtur mātuḥ pitur bījaṃ daivataṃ paramaṃ patiḥ
bhartuḥ prasādāt strīṇāṃ vai ratiḥ putra-phalaṃ tathā（*25*）
pālanādd hi patis tvaṃ me bhartāsi bharaṇān mama
putra-pradānād vara-das tasmāt saktūn gṛhāṇa me（*MBh.14.93.26*）
（子は）季（血）は母より、胤は父より享ける。されば夫は神、
夫のお蔭で女に喜びあり、息子という果実も有り。
守る故に夫、妾を扶養する故に我が扶養者、
息子を授ける故に願いを叶える者。されば我が麦粉を受け給え。

ここに妻は梵語に於いて「夫」を意味する三つの語の、通俗語言（*pālana = pati, bharaṇa = bhartṛ, putra-pradāna = varada*）を説いて夫を説得するに及び、彼は妻の分け前を受ける事を承諾して、それをバラモンに与えた。併しバラモンはそれを食べても尚満足しない。夫が再び思案に暮れていると、今度は息子が出て来て、命あっての者種、老父を養うは息子の義務であると言って、自分もここに参加したいと申し出る。

bhavān hi paripālyo me sarva-yatnair dvijottama
sādhūnāṃ kāṅkṣitaṃ hy etat pitur vṛddhasya poṣaṇam（*31*）
prāṇa-dhāraṇa-mātreṇa śakyaṃ kartuṃ tapas tvayā
prāṇo hi paramo dharmaḥ sthito deheṣu dehināṃ（*MBh.14.93.33*）
全力を尽して、貴方は私によって守られねばなりませぬ。
老父を扶養する事は、善人の欲するところ。
呼吸（命）あってこそ、貴方の苦行も可能です。
蓋し、呼吸（命）こそは、人間の身体中で最高のもの（*dharma*）。

これに対して父は言う。

api varṣa-sahasrītvaṃ bāla eva mato mama
utpādya putraṃ hi pitākṛta-kṛtyo bhavaty uta（*34*）
jīrṇena vayasāputra na mākṣud bādhate 'pi ca
dīrgha-kālaṃ tapas taptaṃ na me maraṇato bhayam（*MBh.14.93.36*）
未だほんの子供である汝は、幾百の春秋に富む。
又息子を産んで初めて、父は己が義務を果す事となる。
何分にも年取っているから、空腹はそれ程余を悩まさない。
長い間、苦行しているから、余に死への恐怖はない。

これに対して息子は反論する。

apatyam asmi te putras trāṇāt putro hi viśrutaḥ
ātmāputraḥ smṛtas tasmāt trāhy ātmānam ihātmanā（*MBh.14.93.37*）
私は貴方の後継ぎ、即ち息子です。救済する故に息子と言われる。
己は即ちこれ息子なりと言われている。さればここに己によって己を救い給え。

斯く息子が「息子」の通俗語源説（*trāṇa = putra*）を説いて父を説得すると、父は息子の言を容れて麦粉を受取り、それをバラモンに提供した。併し、それでも尚バラモンは満足しないのを見て、父は恥じて又も思案に暮れる。それを見た息子の嫁は、最後に自分の麦粉提供を申出るが、父は若い女が餓え苦しんでいるのを見るに堪えないと言って断る。これに対して嫁は「卿は我が師（ 夫）の師なれば、神の上の神」と言って更に言う。

dehaḥ prāṇaśca dharmaśca śuśrūṣārtham idaṃ guroḥ
tava vipra prasādena lokān prāpsyāmy abhīpsitān（*51*）
avekṣyāiti kṛtvātvaṃ dṛḍha-bhaktyeti vādvija
cintyāmameyam iti vāsaktūn ādātum arhasi（*MBh.14.93.52*）
この身体も、生命も、功徳（*dharma*）も、長上奉仕の為にあります。
貴方のお蔭で妾（の如き）も、望ましき天国を享けられましょう。
「女（嫁）は看てやらねば」、或いは「堅固なる信愛により」、
将又「彼女の事は俺が考えてやらねば」（との有難き思し召し）故にこそ、（私の）麦粉をお受けになる資格があります。

姑は、嫁の誠意と人柄を讃えてそれを受け、バラモンに提供すると、彼は遂に満足して人間の姿を取り、次の様に言った。

śuddhena tava dānena nyāyopāttena yatnataḥ
yathā-śakti vimuktena prīto 'smi dvija-sattama（*57*）
aho dānaṃ ghuṣyate te svarge svarga-nivāsibhiḥ
gaganāt puṣpa-varṣaṃ ca paśyasva patitaṃ bhuvi（*58*）
surarṣi-deva-gandharvāye ca deva-puraḥsarāḥ
stuvanto deva-dūtāśca sthitādānena vismitāḥ（*MBh.14.93.59*）
汝の、心篭れる布施、努力の結果、理に適って得たものを、
力の限り与えてくれた（この布施）により、バラモンよ、余は満足した。
汝の布施は天界にこだまし、見よ、天人達は地に花の雨を降らす。
神々を先として、神仙、神々、乾奪婆、神の使者達も汝の布施行に驚き、讃える。

Dharma は彼に、天の住人は凡て汝の来訪を待っているから、急ぎ天界に赴く様に勧めながら、更に彼の所行を讃えて言う。

sarva-svam etad yasmāt te tyaktaṃ śuddhena cetasā

kṛcchra-kāle tataḥ svargo jito 'yaṃ tava karmaṇā（*64*）
kṣuddhānirṇudati prajñāṃ dharmyāṃ buddhiṃ vyapohati
kṣuddhā-parigata-jṇāno dhṛtiṃ tyajati caiva ha（*65*）
bubhukṣāṃ jayate yas tu sa sravgaṃ jayate dhruvam
yadādāna-rucir bhavati tadādharmo na sīdati（*66*）
anavekṣya suta-snehaṃ kalatra-sneham eva ca
dharmam eva guruṃ jñātvātṛṣṇāna gaṇitātvayā（*MBh.14.93.67*）
sahasra-śaktiśca śataṃ śata-śaktir daśāpi ca
dadyād apaśca yaḥ śaktyāsarve tulya-phalāḥ smṛtāḥ（*71*）
na dharmaḥ prīyate tāta dānair dattair mahā-phalaiḥ
nyāya-labdhair yathāsūkṣmaiḥ śraddhā-pūtaiḥ sa tuṣyati（*73*）
汝は心を籠めて窮迫時にも全財産を棄てた。汝の行為により、天界は得られた。
飢餓は知性を暗ませ、正しい判断を狂わせる。
知性が飢餓によって侵された人は、堅忍不抜を棄てる。
飢餓に打克つ人が天界を得るは必定。布施に献身すれば、Dharma は滅びず。
息子と妻への愛着を顧みず、法（己が義務）のみを貴しとして、汝は渇を物の数ともせざりき。
千力の者が百を、百力の者が十を布施するも、
力の限り、水一掬を布施する者、それら総ては（功徳の）効等しと伝えられる。
Dharma は、大なる（功徳の）効を期して為されたる布施によっては歓ばず。
理に適って獲られ、心が籠もった、僅か（少量）の布施によって満足する程には。

「布施の功徳」は量によってではなく、質によって定まる。富裕な人が、その財の十分の一によって為す豊かな布施も、心の籠った（*śraddhā*）布施であれば、仮令それが僅かであっても、一切に凌駕する。
　Dharma は更に、幾千の牛を布施したヌリガ王が、自分のものでない、一頭の他人の牛を布施した咎によって地獄に落ち、己が肉を刻んで与えたシビ王が天界に到った物語をして、このバラモン一家を天に送り出す。

rājasūyair bahubhir iṣṭvāvipula-dakṣiṇaiḥ
na cāśvamedhair bahubhiḥ phalaṃ samam idaṃ tava（*78*）
saktu-prasthena hi jito brahma-lokas tvayānagha
virajo brahma-bhavanaṃ gaccha vipra yathecchakam（*79*）
返礼豊かな多くの即位式を（盛大に）行い、多くの馬祇祭を行っても
その果報は、汝のそれに等しい。
というのも、汝は麦粉一升によって、梵界を獲たのであるから。
（情熱の）穢れを去って、欲するままにバラモンよ、梵の館に赴くべし。

この様にして、老バラモンが妻と息子夫婦を伴って天界に立ち去った時、偶々この Nakula は穴より這い出して来た（*tato 'haṃ niḥsṛto bilāt*:83）のであったが、彼はその時、麦粉の匂い（*saktu-gandha*）、水の湿り気（*kledena salilasya*）、花の雨に触れた為か、何れにしても善人の僅かながら、純粋な布施、苦行にあやかって、自分の頭と身体の半分が金色に化したのであった。

tasya satyābhisaṃdhasya sūkṣma-dānena caiva ha
śarīrārdhaṃ ca me viprāḥ śātakumbha-mayaṃ kṛtam
paśyatedaṃ suvipulaṃ tapasātasya dhīmataḥ（*MBh.14.93.85*）
真実なる無私なる思いを（*abhisaṃdhi*）抱く彼の僅かな布施により、
我が身体の半分は金色に化した。汝等見よ、賢明なる彼の苦行の為す、この偉大な業を。

そこで、どうしたら身体のもう半分が金色になるであろうかと思って、いそいそと苦行林や犠牲祭の場に、あちこち出掛けてみたいた所、今回この Kuru 王の祭式があると聞いて、ここに一縷の望みを抱いて来て見たのだが、私のもう半分はとうとう金色にはならなかった（87）。そこで私は嘲笑して「この祭式は麦粉一升にも等しからず（*saktu-prasthena yajño 'yaṃ saṃmito neti sarvathā*:88）」と言ったのである。

saktu-prastha-lavais tair hi tadāhaṃ kāñcanī-kṛtaḥ
na hi yajño mahān eṣa sadṛśas tair mato mama（*MBh.14.93.89*）
その時、僅か麦粉一升によって私は金色に化したが、（今回他の半分は金色に化さなかった）
それでこの盛大な祭式も、彼等（バラモン一家の）それに匹敵しないと、余は思うのである。

僅かでも（*sūkṣma*）心を籠めて（*satyābhisaṃdhi, śraddhā*）[12] 只管布施する事（*śuddha dāna*）が、如何に優れているか、「貧者の一灯」の物語を思わせる物語がここに語られている。富者が、自らの余裕を以ってする多くの施しと、貧者の仮令僅かでも全身全霊を捧げてなす純粋な布施の「功徳」の差が、この「金色化」の効力の有無によって、ここに端的に示されている様に思われる。

（2-6）Krodha（怒らそうと試みる）

上述の MBh.14.92-93 に登場する「人間の言葉を語る Nakula」が一体何者であるのか、その素性の説明物語が MBh.14 の最終章に語られる。物語は先ず Janamejaya の質問から始っている。

ko 'sau nakula-rūpeṇa śirasākāñcanena vai
prāha mānuṣavad vācam etat pṛṣṭo vadasva me（*MBh.14.96.1*）
金色の頭をした Nakula の姿を取って、人間の様に言葉を語る者は
そもそも一体何者であったのか、お話下さい。

そこで Vaiśaṃpāyana は物語を始める。

その昔、聖仙 Jamadagni が祖先祭（*śrāddha*）を執り行った時、祭式用の乳牛（*homa-dhenu*）がやって来たので、彼は自らその乳を搾り、その搾ったミルクを、真新しい、頑丈で清潔な容器の中に納めた（3）。時に Dharma は、Krodha の相を執って、その鍋を掻き乱した（4）。

jijñāsus tam ṛṣ.i-śreṣṭhaṃ kiṃ kuryād vipriye kṛte
iti saṃcintya durmedhādharṣayām āsa tat payaḥ（*5*）
「嫌な事（*vipriya*）をされた時に、この聖仙がどう（反応）するか」試してやろう
と思って（*jijñāsu*）、愚かな彼はその乳を掻き混ぜた。

聖仙はそれを知っても、Krodha に対して少しも怒らなかった。すると Krodha は合掌なし、己が姿を取って、次の様に言った。

jito 'smīti bhṛgu-śreṣṭha bhṛgavo hy atiroṣaṇāḥ
loke mithyā-vādo 'yaṃ yat tvayāsmi parājitaḥ（*7*）
so 'haṃ tvayi sthito hy adya kṣamāvati mahātmani
bibhemi tapasaḥ sādho prasādaṃ kuru me vibho（*8*）
私は参った。Bhṛgu 族の最勝者よ、「Bhṛgu 族の人達は、ひどく怒りっぽい」
と言う、この世間の噂は嘘だ。と言うのも私は貴方によって打ち負かされたから。
私は今日から、斯くも忍耐強く、偉大なる貴方の許に留まります。
私は、苦行を怖れています。どうかお許し下さい。

これに対して Jamadagni は「余は既に汝の正体をこの眼で見たから、何一つ心配する事なくどこへでも行くがよい。汝は余に何も悪い事をしていないから、私には「憤懣」の気持（*manyu*）などさらにない（9)」と言って、更に付け加えて言った。

yān uddiṣya tu saṃkalpaḥ payaso 'sya kṛto mayā
pitaras te mahābhāgās tebhyo budhyasva gamyātām（*10*）
でも、そもそも余が、この乳を搾ろうとしたのは誰の為であったかというと、それは
貴き御先祖様であるから、汝はどこへ行ってもよいが、彼等には気をつけるがよい。

斯く言わた Krodha は些か怖くなりながら、その場から姿を消したが、果たして父祖達の怒り（*abhiṣaṅga*）を買って、彼は Nakula と化してしまった（11)。

彼はこの呪いを解いて貰おうと、彼等父祖達に許しを乞うた。すると父祖達は「Dharma よ、汝が傷つけられた時に、汝は（この呪詛から）解放されるであろう」（*yadādharma kṣepsyase mokṣyase tadā*）と予言した。

斯く言われて彼は、祭式の行われる地方や仙人の森（*dharmyāraṇya*）を、己の軽蔑を求めつつ（*jugupsan*）遍歴し、最後にこの祭式に巡り合わせた。そして、Dharma の息子（Yudhiṣṭhira）を、例の「麦粉一升」（*saktu-prastha*）によって非難軽蔑して（*ākṣipya*)、斯くて Krodha はその呪いを解かれたのであった。何となれば Yudhiṣṭhira こそ、Dharma に他ならなかった故である。

以上が、かの Yudhiṣṭhira の催した祭式の時に起こった事件の顛末であるが、その Nakula は我等衆人看視の前で姿を隠した。

（2-7）MBh.14.32（バラモンに変装）

Janaka 王は、或るバラモンを懲罰する為に「汝は我が領土内に住んではいけない（*viṣaye me na vastavyam iti śiṣṭy-artham abravīt*: MBh.14.32.2b)」と言って、国外への追放を命じる。するとこのバラモンは、王に質問して言った。

ācakṣva viṣayaṃ rājan yāvāṃs tava vaśe sthitaḥ（*3cd*）
so 'nyasya viṣaye rājño vastum icchāmy ahaṃ vibho
vacas te kartum icchāmi yathā-śāstraṃ mahīpāte（*4*）

王様、何処までが貴方の支配する領土なのか、仰って下さい。
仰せ畏こみ、私は仰せのままに他の王の領土に住みたいと存じます。

斯くバラモンに問われると王は、一瞬熱い溜息をついたまま、返答しなかった。元来、気力旺盛な王であったが、彼は座ったまま考え込んでしまった。恰も日蝕の悪魔が、太陽を襲うかの如く、突如失望落胆（*kaśmala*）が王を襲った。失望が去った時、漸く王はバラモンに言った。

「辺境を含めて、この王国は、確かに父祖伝来のものであるけれども、
大地をくまなく歩いてみても、余は領土（というもの）を発見し得なかった。
大地に於いて領土を発見し得ぬまま、余はそれを（首都の）Mithilā に求めてみたが、
それでも発見出来ず、我が子孫（*prajā*）を求めた。
それでも尚見つけ得なかった時、失望落胆が余を襲ったのであったが、
それが去った時に、一つの考え（*mati*）が頭に浮かんだ」

tayāna viṣayaṃ manye sarvo vāviṣayo mama
ātmāpi cāyaṃ na mama sarvāvāpṛthivīmama
（*yathāmama tathānyeṣām iti manye dvijottama*）
uṣyatāṃ yāvad utsāho bhujyatāṃ yāvad iṣyate（*MBh.14..32.11*）
それによれば、領土など（余には）ない。それとも一切は我が領土であるのか。
この自己（身体）さえも我が物ではない。それとも一切大地は我が物であるのか。
（〔一切は〕余にとってと同様、他人の場合もそうなのであろう
〔＝一切は余の物であり、又他人の物である〕と余は思う。再生族の最たる者よ）
好きなだけ、ここに留まり、お楽しみ下さい。

するとバラモンは王に訊ねて言った。

pitṛ-paitāmahe rājye vaśye janapade sati
brūhi kāṃ buddhim āsthāya mamatva varjitaṃ tvayā（*12*）
父祖伝来の王国を支配していながら、
一体どういう考え（*buddhi*）に基づいて貴方は自我意識（*mamatva*）を棄てたのだ。

王は答えて言う。

antavanta ihārambhāviditāḥ sarva-karmasu
nādhyagaccham ahaṃ yasmān mamedam iti yad bhavet（*14*）
kasyedam iti kasya svam iti veda-vacas tathā
nādhyagaccham ahaṃ buddhyāmamedam iti yad bhavet（*15*）
etāṃ buddhiṃ viniścitya mamatvaṃ varjitaṃ mayā
śṛṇu buddhiṃ tu yāṃ jñātvāsarvatra viṣayo mama（*16*）
nāham ātmārtham icchāmi gandhān ghrāṇa-gatān api
tasmān me nirjitābhūmir vaśe tiṣṭhati nityadā（*17*）

nāham ātmārtham icchāmi rasān āsye 'pi vartataḥ
āpo me nirjitās tasmād vaśe tiṣṭhanti nityadā（*18*）
nāham ātmāratham icchāmi rūpaṃ jyotiśca cakṣuṣā
tasmān me nirjitaṃ jyotir vaśe tiṣṭati nityadā（*19*）
nāham ātmārātham icchāmi sparśāṃs tvaci gatāśca ye
tasmān me nirjito vāyur vaśe tiṣṭhati nityadā（*20*）
nāham ātmārtham icchāmi śabdāñ śrotra-gatān api
tasmān me nirjitāśabdāvaśe tiṣṭhanti nityadā（*21*）
nāham ātmārtham icchāmi mano nityaṃ manontare
mano me nirjitaṃ tasmād vaśetiṣṭhati nityadā（*22*）
devebhyaśca pitṛbhyaśca bhūtebhyo 'tithibhiḥ saha
ity arthaṃ sarva eveme samārambhābhavanti vai（*23*）

この世に於ける一切の営みの開始には、必ず終りがある。
私は以前この事を理解していなかった。それで私は「これは我が物」の意識を持っていたのである。（14）
「これは誰の物」、「自分の物は誰の物」というヴェーダの言葉を、これまで余は「覚」（*buddhi*）を以って理解して来なかった。
その為に「これは我が物」とばかり思っていた。（15）
でもこの「覚」を確認して以来、余は「自分の物意識」から解放された。
聞き給え、この「覚」を。それを知れば又「我が領土は何処にもあり」（という事になる）（16）
（偶々）鼻のところにやって来た匂いさえ、余はそれを自分の為には欲しない。
それで余は（匂いの基体である）地を制した。それは常に我が支配下にある。（17）
口の中にある（六）味さえ、余はそれを自分の為には欲しない。
それで私は味の基体である水を制した。それは常に我が支配下にある。（18）
（視力）眼によって捉える色や光も、余は自分の為には欲しない。
それで私は（ 色の）基体である光を制した。それは常に我が支配下に在る。（19）
皮膚に感じる触覚も、余は自分の為には欲しない。
それで私はその基体である風を制した。それは常に我が支配下に在る。（20）
耳に来たった音声さえ、余は自分の為には欲しない。
それで私は音を制した。それは常に我が支配下にある。（21）
我が心の中に常にある心を、私は自分の物とは思わない。
それで私は心を制した。心は常に我が支配下に在る。（22）
神々の為、御先祖様の為、生類一般の為、将又客人の為に、
万事その様に、余の一切の営みがある。（23）

この様に Janaka 王が、己が悟りの内容を話すと、事態は一変する。

tataḥ prahasya janakaṃ brāhmaṇaḥ punar abravīt
tvaj-jijñāsārtham adyeha viddhi māṃ dharmam āgatam（*24*）
tvam asya brahma-nābhasya buddhy-ārasyānivartinaḥ

sattvanemin-niruddhasya cakrasyaikaḥ pravartakaḥ（*MBh.14.32.25*）
するとバラモンはにっこり笑って、王に向って次の様に言った。
「余は今日、汝を試さん為にここに来たれり。余を Dharma と知れ。
汝は、梵を甑とし、覚を輻とし、善性を車縁とする、不退転の輪を転ずる唯一者（転輪聖王）なり」

この章句は少々難解ではあるが、国外追放を命じたバラモンに、「自分の領土」とは一体如何なるものであるのかと問われて、Janaka 王は失神する程のショックを受け、自ら深く反省する。そして彼は五元素とその属性、更に第六感である意（*manas*）に対しても自意識、所有意識を棄てた。自意識を棄てた者のみが「真の王」の名に値するとなす一節である。

（2-8）Vasiṣṭha

王族 Viśvāmitra が苦行の末に、一階級特進してバラモンになった物語は、叙事詩に在っては、彼の弟子 Gālava が「強情」（*nirbandha*）の故に失敗した物語（Gālava-carita）の中に語られ、Dharma はここで聖仙 Vasiṣṭha の姿をとって現れる。

viśvāmitraṃ tapasyantaṃ dharmo jijñāsayāpurā
abhyagacchat svayaṃ bhūtvāvasiṣṭho bhagavān ṛṣiḥ（*8*）
saptarṣīṇām anyatamaṃ veṣam āsthāya bhārata
bubhukṣuḥ kṣudhito rājann āśramaṃ kauśikasya hi（*9*）
viśvāmitro 'tha saṃbhrāntaḥ śrapayām āsa vai carum
paramānnasya yatnena na ca sa pratyapālayat（*10*）
annaṃ tena yadābhuktam anyair dattaṃ tapasvibhiḥ
atha gṛhyānnam atyuṣṇaṃ viśvāmitro abhyupāgamāt（*11*）
bhuktaṃ me tiṣṭha tāvat tvamity uktvābhagavān yayau
viśvāmitras tato rājan sthita eva mahā-dyutiḥ（*MBh.5.104.12*）
その昔 Dharma は、苦行中の Viśvāmitra を試さんと、
（有名な）七人の仙人の何れかの姿を取って、おお、バラタの後裔よ、（8）
自ら貴き聖仙 Vasiṣṭha となり、飢餓に襲われ空腹を満たさんと
Kuśika の子（Viśvāmitra）の庵にやって来た。（9）
すると Viśvāmitra は、当惑しつつも、美味しい食物を作ろうと、
一生懸命乳粥を料理したが、一方の彼（Vasiṣṭha）は待つ事をしなかった。（10）
他の苦行者達が呉れた食物を、彼が食べてしまった後に、
極めて温かい食物を携えて、Viśvāmitra が（遅れて）やって来た。（11）
「余はもう食事を済ませたから、ちょっと待て」と言ったまま聖者は立去ってしまった。
それ以来、王よ、光輝に満てる Viśvāmitra は、そのまま立っていた。（12）

Vasiṣṭha 仙は、そう言ったまま立ち去り、久しく戻って来なかったが、一方 Viśvāmitra は奉仕の姿勢を崩さずに、そのままの姿勢で彼の帰りを待っていた。

bhaktaṃ pragṛhya mūrdhnātad-bāhubhyāṃ pārśvato 'gamat
sthitaḥ sthāṇur ivābhyāśe niśceṣṭo mārutāśanaḥ（*13*）

tasya śuśrūṣaṇe yatnam akarod gālavo muniḥ
gauravād bahumānāc ca hārdena priya-kāmyayā（*14*）
atha varṣa-śate pūrṇe dharmaḥ punar upāgamat
vāsiṣṭhaṃ veṣam āsthāya kauśikaṃ bhojanepsayā（*15*）
sa dṛṣṭvāśirasābhaktaṃ dhriyamāṇaṃ maharṣiṇā
tiṣṭhatāvāyu-bhakṣeṇa viśvāmitreṇa dhīmatā（*16*）
pratigṛhya tato dharmas tathaivoṣṇaṃ tathānavam
bhuktvāprīto 'smi viprarṣe tam uktvāsa munir gataḥ（*17*）
kṣātrabhāvād apagato brāhmaṇatva upāgataḥ
dharmasya vacanāt prīto viśvāmitras tadābhavat（*MBh.5.104.18*）
彼は、両側から両腕で抑えながら、頭でそれを支えていた（*'vahat?*）
（庵の）側で、恰も柱の如く不動のまま、風を食して立っていた。(13)
尊敬と評価の故に、又心を籠めて彼に奉仕せんと、Gālava 仙は一生懸命努めた。(14)
満百年が過ぎた頃、Dharma は再び食を求め、
Vasiṣṭha の姿をとって Kuśika の子の許へやって来た。(15)
彼は聡明なる大仙人 Viśvāmitra が（引続き）、
風を食として、頭で食物を支えているのを見ると、(16)
Dharma は、（今も尚）熱く、且つは新しいその食物を受取って、食べた。
そして「バラモン仙人よ、余は満足である」と言った。かの聖者もその場を去った。(17)
Dharma のこの文言によって、彼は武士の身分を脱してバラモンとなった。
Viśvāmitra は、その時大変喜んだ。(18)

この物語によって知られる様に、「Dharma の一言」は凡てを叶える。彼は「余は汝に満足した」と言ったまま去って行ったが、その一言によって王族はバラモンとなったのである。

（2-9）MBh.12.264（鹿）

概して古代インドに於いて、「祭式（*yajña*）」は、「天界」「子孫」「財産」更には「復讐」等、とかく世俗の果報を期待して行われるが、「Dharma の為（*dharmārtha*）」にのみ行われる様な祭式が存在するのか、又あるとすればそれはどの様なものがあるか。この種の疑問を抱いて Yudhiṣṭhira は、Bhīṣma に質問すると、長老はその昔 Nārada 仙の語ったと言われる「落穂拾いバラモン」（*uñccha-vṛtti*）の物語を紹介する。先ず我々は問題点を明示する為、Yudhiṣṭhira の質問から始めるであろう。

bahūnāṃ yajña-tapasām ekārthānāṃ pitāmaha
dharmārthaṃ na sukhārthārthaṃ kathaṃ yajñaḥ samāhitaḥ（*MBh.12.264.1*）
祭式や苦行は種々様々であるが、それらは皆或る一つの目的を持っている。
でも、幸福や財産（の獲得）を目的とせず、ダルマの為になされる祭式とはどの様なものか。

これに答えて長老は言う。その昔、Vidarbha 国に、Satya と名付ける一バラモンあり、彼は祭式の為の祭式を行っていた（*yajñe yajñaṃ samādadhe*: 3）。彼は粗食に耐え、常に苦くて不味い草を食して生命を繋いでいたが、それらは彼の苦行によって甘美なものと化した。

upagamya vane pṛthvīṃ sarva-bhūtāvihiṃsayā
api mūla-phalair ijyo yajñaḥ svargyaḥ paraṃtapa（*5*）
tasya bhāryāvrata-kṛśā,cuciḥ puṣkara-cāriṇī
yajña-patnītvam ānītāsatyenānuvidhīyate
sātu śāpa-paritrastāna svabhāvānuvaratinī（*6*）
彼は森の中に住み、地上で（?）一切生類に危害を施さなかった。
（事実）球根や果物（菜食）でも、昇天を約する祭式は可能であった。
彼の妻 Puṣkaracāriṇī は、祭式の伴侶として嫁に来て、禁欲戒行故に痩身、行い清く、
夫に忠実に従っていたが、併し本心からでなく、唯夫の呪いが恐いからそうしていたに過ぎなかった。

折しも、Śukra の一族（で Parṇāda と名づける者）が、その森近くに住んでいたが、嫉妬心から邪念を起し、鹿の姿を取って彼に向かって人間の声をなし、その所行を難じて（*tvayāduṣkṛtakaṃ kṛtam*）、次の様に言った。

yadi mantrāṅga-hīno 'yaṃ yajño bhavati vaikṛtakaḥ
māṃ bhoḥ prakṣipa hotre tvaṃ gaccha svargam atandritaḥ（*9*）
若しも、この〔汝の〕祭式が真言の一部を欠いていると拙い事になるから、
どうか、余を祭火の中に投げ入れろ、そして臆せず天界に赴け。

彼は、もと鹿である自分を犠牲にして祭式を全っとうなものと為し、天国を得よと勧めた。するとそこに Sāvitrī 女神が同じ祭式の庭に来て、彼に鹿の言う通りにする様勧めたが、彼は「隣の人は殺せない（*na hanyāṃ saha-vāsinam*）」と言って断固拒否した。断られた女神は姿を消し、一体この祭式のどこがいけないのかを、見る為に 祭火の中に入って、地界に到った。併し、彼女がそこで見たものは、合掌している Satya で、彼は再度鹿に懇請していた。でも彼は Satya に抱擁されて、「どこへなりとも行き給え」と言われていた。

tataḥ sa hariṇo gatvāpadāny aṣṭau nyavartata
sādhu hiṃsaya māṃ satya hato yāsyāmi sad-gatim（*13*）
すると、鹿は八歩去って行ったが、又戻って来た。
Satya 殿、どうか私を殺し給え、殺されれば、私は天国へ行けるであろうから。

鹿は彼に天眼を与えて、天女とか、ガンダルヴァとか、色々天国の愉しさを見せたのである。

tataḥ suruciraṃ dṛṣṭvāspṛhā-lagnena cakṣuṣā
mṛgam ālokya hiṃsāyāṃ svarga-vāsaṃ samarthayat（*15*）
すると、（一方に）美しい（天国の）様を、切望に執われた眼で見、
（他方に）殺害されて天国に住まんとしている鹿を見て、彼は決断した。

彼が誘惑に負けて、旧友の鹿を殺そうとすると、鹿は忽ち年来森に住んでいたダルマに変容した。そして斯かる行為は祭式の定める所でないと言って、彼に贖罪の道（*niṣkṛti*）を指示しつつ、次の様に説く。

tasya tena tu bhāvena mṛga-hiṃsātmanas tadā
tapo mahat samucchinnaṃ tasmādd hi,msāna yajñiyā（*17*）
鹿を殺そうとする、彼のこの様な心的態度は、（これ迄の）
大なる苦行（の果）を根こそぎにするから、殺生は祭式に不可欠ではない。

そしてダルマは、彼に自分で祭式を行なわしめた。この様にして、彼は妻と和解（*samādhāna*）するに至ったと言われる。

この物語には、幾つかの脱落がある模様で、文意も今ひとつ不分明な部分があるが、もと不殺生を旨としていたバラモンが、鹿の誘惑に負けて本来の誓いを棄て、その鹿の殺害に心が動くと、途端に鹿は Dharma となり、彼に不殺生が祭式と矛盾するものでない事を説いたと言われる。又、ここには「試す」（*jijñāsu*）という語は出て来ないのみならず、これまで見た来た諸例とは些か趣を異にしている。鹿に変身していた Dharma も、本来の「正義の味方」の性格を捨てて、誘惑して人を欺く「誘惑的試練者」の役を担い、又「試される側」のバラモンも、上例に見て来た堅忍不抜を飽く迄堅持する人士ではなく、誘惑に負けてこれまでの苦行の功徳を失ってしまっている。併し、物語の主旨は「殺生は祭式の必要条件でない事」の明示に在り、それはバラモンの妻が、最初から自らの誓とする所であったと言われる。我々はここに、「動物犠牲」を伴わない祭式も、古代インドに存在し、それはダルマに叶うものであった事を知る。

(2-10) 上記の九つの物語の中で七つに在って Dharma は、時に自分自身の姿で現れる事もあるが (2-1 and 2-5)、又時に夜叉（2-2)、犬（2-3)、バラモン（2-4 and 2-7)、聖仙（2-8）の姿を取って、人間を試す（*jijñāsā, jijñāsu*）ことになっている。

残余の二つの物語（2-6 と 2-9）は、それら七つとはやや趣を異にして、彼の公明正大な面は後退している。先ず（2-6）で Dharma は抽象概念 Krodha となり、聖仙 Jamadagni に赦しを乞う形をとり、父祖の呪いを恐れている。又 (2-9) では鹿となって元来敬虔であったバラモンに天国を見せて彼を殺生に誘惑し、彼が誘惑されそうになった時に己が姿を顕して彼を咎め、不殺生を説くが、ここで彼は余りにも策略的で、その為す所が必ずしもフェアーでない嫌いがある。これら物語に見られる彼の弱点は、次章に見る 4 の物語に於いてより一層顕著となるであろう。

(3) Dharma の権威失墜物語

上の物語群に於いて最初の七つは Dharma が人間を試す形（*jijñāsu, jijñāsā*）を取っているが、以下に紹介するものは上記のものとは可也趣きを異にし、Dharma の権威はここで決して高いものとなっていない。時に、彼は最高神 Prajāpati の召使となり、時にバラモンに反論されてタジタジとなって引下ったり、又勇将によって非難されたりしている。彼は変装してカラスとなるが、その動機は羅刹への恐怖の故であった。以下に今一つの叙事詩 Rāmāyaṇa の物語一篇を含めて、それらを順次紹介して行くであろう。

(3-1) R.7.18（Dharma-rāja が烏に変身）

この物語に在って Dharma は Indra, Kubera, Varuṇa の三神と共に現れ、羅刹の猛威に怖れてカラス

に変身する。

R.7.18 には、羅刹 Rāvaṇa の一代記が綴られるが、彼の体力無双は、もと彼の激しい苦行の結果梵天より得た特権（*vara*）の致すところであった。梵天は彼の苦行に満足して、その願いを叶えさせるが、彼は「神々及び阿修羅によて殺されぬ事」を梵天に懇情した。彼自身が「人間を食らう者」であったから、つい「殺されぬ者」の中に「人間」を入れて置かなかったのが、彼の重大な落度であった。その為に Viṣṇu 神は「人間」ラーマに化身して、彼を殺す事となったのである。

Rāvaṇa が、自分の乗物である Puṣpaka を駆って Marutta 王の都 Uśīrabīja を訪れた時、王は神々と共に祭式を行っていた。到来した彼を見て神々は思う。

dṛṣṭvādevās tu tad-rakṣo vara-dānena durjayam
tāṃ tāṃ yoniṃ samāpannās tasya dharṣaṇa-bhīravaḥ（*4*）
indro mayūraḥ saṃvṛtto dharmarājas tu vāyasaḥ
kṛkalāso dhanādhyakṣo haṃso vai varuṇo 'bhavat（*R.7.18.5*）
かの羅刹を見ると神々は、彼が（梵天から）願い事（*vara*）を叶えて貰っているので
とても敵し得ないと思って、攻撃を恐れ、夫々（元の）胎（＝姿形）（*yoni*）に変容した。
Indra は孔雀となり、Dharma はカラス、財の主催者 Kubera はトカゲ、Varuṇa は白鳥となった。

羅刹が祭式の庭に闖入して来たのを見て、祭式執行中の Marutta 王は彼を咎めるが、羅刹は豪語して「世に有名な俺の力を知らないのか」と脅して王に宣戦を布告する。王はこれに応えて、今正に両者の間に戦争が始まろうとした時、大仙 Samvarta は王に忠告した。

so 'bravīt sneha-saṃyuktaṃ maruttaṃ taṃ mahān ṛṣiḥ
śrotavyaṃ yadi mad-vākyaṃ saṃprahāro na te kṣamaḥ（*14*）
māheśvaram idaṃ satram asamāptaṃ kulaṃ dahet
dīkṣitasya kuto yuddhaṃ krūratvaṃ dīkṣite kutaḥ（*15*）
saṃśayaśca raṇe nityaṃ rākṣasaścaiṣa durjayaḥ
sa nivṛtto guror vākyān maruttaḥ pṛthivī-patiḥ
visṛjya sa-śara,m cāpa,m svastho makha-mukho 'bhavat（*R.7.18.16*）
すると大仙は愛情籠めて Marutta に言った。「余の言を聞き給え、争う事は汝に不利である。
それに大自在天（シヴァ）の為に始められたこの祭式は、最後まで行わないと一族を滅ぼし兼ねない。
祭式を始めた者が何故戦うのか。彼にとって残忍性があってはならない。
戦いの数は常に不定である。又羅刹をやっつけるのは大変だ。」

Marutta 王は、この師の言葉に従って戦いを止め、弓矢を収めて心静かに祭式に専念した。

すると彼が敗北を認めたと思って、Śuka は大声で Rāvaṇa の勝利を宣言すると、羅刹は歓びの余り大声を発して、その祭式に居合わせた大仙達を喰らい、血を吸って満足して大地を後にした。羅刹が去った時、神々はもとの自分の姿に戻って、夫々の動物に感謝の言葉を述べて夫々褒美を与える。先ず帝釈天は孔雀に、帝釈天の千の眼は、もと青かった（*nīla*）汝の尾に生じて美しく輝き（*vicitra*）、雨季到来時には歓喜の徴として、喜びを高らかに歌い上げるであろうと言う。一方、ダルマはカラスに感謝して言う。

yathānye vividhai rogaiḥ pīḍyante prāṇino yathā
te na te prabhaviṣyanti mayi prīte na saṃśayaḥ（*24*）
mṛtyutas te bhayaṃ nāsti varān mama vihaṃgama
yāvat tvāṃ na vadhṣyanti narās tāvad bhaviṣyati（*25*）
ye ca mad-viṣaya-sthās tu mānavāḥ kṣudhayārditāḥ
tvayi bhukte tu tṛptās te bhaviṣyanti sabanndhavāḥ（*R.7.18.26*）

周知の通り、他の諸々の生類が色々な病気によって悩まされているが、
余が満足した以上、汝にはそれら（諸病）は有り得ないであろう。疑う勿れ。(24)
我が *vara* 故に、汝には死への恐怖は存在しない。
人間どもが汝を殺害しない限りは、汝は生き続ける。(25)
我が領内にいる人間どもは、（現在）飢餓に苦しんでいるが、
汝に餌が与えられている限りは、彼等は親族共々満足するであろう。(26)

その他、Varuṇa は、ガンジス川の水の上に遊んでいたハンサに、月面にも匹敵する美しく、川面の白き泡にも似た色を与えた。と言うのもハンサの色は以前真白ではなく、翼は先の方が青黒く、胸は若草の先端（*śaṣpāgra*）の色を呈していた故である。

Kubera は山の上にいたトカゲに、感謝の印として金色を与えた。トカゲの首の金色は以来恒常不変のものとなったと言われる。

以上が四人の神々の動物変身物語であるが、ここには「試練」（*jijñāsā*）のモチーフはないのみならず、彼は他の神々と共にアスラを怖れて変身したのであった。

併しここで我々は Dharma-rāja と呼ばれる（23）神が、ダルマそのものではなく、寧ろ Yama を指しているのではないかとの印象を受ける。何故なら Yama は人間の病死を司り、彼等に飢餓を惹起する故である。Yama とカラスとの関係も興味深いが、Yama が「四人の神々（*loka-pāla*）」の一人として現れるのは、決して不思議ではなく、以前にもナラ王物語に我々が見たところであった。

（3-2）MBh.12.192（Jāpakopākhyāna: Kāla, Dharma, Mṛtyu）

この物語は、行い正しく、激しい苦行を積み、敬虔にして一切のヴェーダに精通している或るバラモンの物語で、彼は雪山の麓に篭って千年間只管唱名朗詠に専念従事（*jāpaka*）していた。するとヴェーダの母神（*veda-mātṛ*）である Sāvitrī 女神が彼の前に姿を現わして、彼に満足したと仰せになったが、彼は唱名に従事したまま全く女神を顧みようとしなかった。一方女神は彼を憐れんで、その唱名行為を嘉した。すると唱名が終わった時に、彼は女神の足下に平伏して、次の様に言った。

diṣṭyādevi prasannātvaṃ darśanaṃ cāgatāmama
yadi vāpi prasannāsi japye me ramatāṃ manaḥ（*10*）

女神様、わざわざ御光来賜るとは身に余る幸せ。
若し願わくば、私の心が唱名行為に常に専念出来ます様に。

女神が更に促すと、彼は「唱名専心」の増大強化（*vṛdh-*）と、心の専念（*manasaśca samādhi*: 12-

13）の増大を願うのみであった。女神は、とかく聖仙の多くは地獄には落ちるが、彼にはその様な事はないと保証し、寧ろ「梵の境涯」（*brahmaṇaḥ sthāna*: 15）への到達を約した。そして次の様に激励し、近く起こるべき事を予言して立去った。

niyato japa caikāgro dharmas tvāṃ samupaiṣyati
kālo mṛtyur yamaścava samāyāsyanti te 'ntikam
bhavitāca vivādo 'tra tava teṣāṃ ca dharmataḥ（*16*）
心して、専心唱名を続けよ、するとダルマが汝の許に来るであろう。
カーラ、死、ヤマも一緒に汝の側へ来るであろう。
そして汝は彼等と論争する事となろう。

バラモンは引続き更に神々の千年間唱名に専念していたが、それが終了した時、果たしてダルマが姿を顕し、彼を称讃して次の様に言った。

dvijāte paśya māṃ dharmam ahaṃ tvāṃ draṣṭum āgataḥ
japyasya ca phalaṃ yat te saṃprāptaṃ tac ca me śṛṇu（*19*）
jitālokās tvayāsarve ye divyāye ca mānuṣāḥ
devānāṃ nirayān sādho sarvān utkramya yāsyasi（*20*）
prāṇa-tyāgaṃ kuru mune gaccha lokān yathepsitān
tyaktvātmanaḥ śarīraṃ ca tato lokān avāpsyasi（*21*）
バラモン殿、余はダルマである、汝に会いに来た。
唱名行為の果報を汝は得たから、今から余の言う事を聞け。
汝は既に神々人間の全世界を征した。神々の地獄を凡て乗り越えて汝は旅立つがよい。
ムニよ、生命（*prāṇa*）を棄てて、汝の欲する好きな世界に行くがよい。
自分の身体（*śarīra*）を棄て、汝はこれらの諸世界に至るであろう。

これに対して、バラモンは反論する。

kṛtaṃ lokair hi me dharma gaccha ca tvaṃ yathā-sukham
bahu-duḥkha-sukhaṃ dehaṃ notsṛjeyam ahaṃ vibho（*22*）
ダルマよ、私には（汝の示した）これら諸世界は不要である。何処なりと好きな様に去り給え。
仮令、苦楽多くとも、私はこの身体（*deha*）を棄てたくない。

それでも Dharma は、身体（*śarīra*）を棄てて天界（*svarga*）に昇る様に勧めるが、彼は一向に聞く気配を示さない。

na rocaye svarga-vāsaṃ vinādehād ahaṃ vibho
gaccha dharma na me śraddhāsvargaṃ gantuṃ vinātmanā（*24*）
私は身体（*deha*）なしで天に住むのは嫌だ。去れ、Dharma よ、
私は身体（*ātman*）なしに天に行く気（*śraddhā*）[13] は毛頭ない。

再三「去れ」と言われながらも、Dharma は身体に執着せず、穢れなき（*arajas*）天に至れば、汝は決して後悔する事はないであろうと更に誘うが、彼は自分は唱名してさえいればそれで良いので（*rame japann*）不滅の天など要らない。でもどうしても天国へ行かねばならないなら、身体ごとそこへ行く。そうでなけらば絶対嫌だと言う。そこで最後に Dharma は彼に言う。

yadi tvaṃ necchasi tyaktuṃ śarīraṃ paśya vai dvija
eṣa kālas tathāmṛtyur yamaśca tvām upāgatāḥ（*MBh.12.192.27*）
若し汝がどうしても身体を棄てるのが嫌だとしても、見よ、再生族よ、
Kāla と Mṛtyu と Yama が、（親しく）汝の所へ来るであろう。

すると果たしてこの三者が彼の前に現れ、先ず Yama が最初に口を切って、汝の長期に亘る苦行（*tapas*）が見事に実を結んだと言う。次いで Kāla は彼に唱名（*japya*）の功徳の結実を告げ、今こそ天界に昇る機が熟した（*kālas te svargam āroḍhum*）と宣言する。そして最後に Mṛtyu は「自分は汝をここから連れ出す様に Kāla に命令されている身である」（*kālena coditaṃ vipra tvām ito netum adya vai*: 31）と言う。これに対してバラモンは、この四人の来訪者に対して然るべき客人接待の礼を尽した後、喜んで「さあ、何の御用ですか、何でも致しましょう」と申し出た。(33)

折りしも武人 Ikṣvāku は聖地巡礼の途上に在り、この場に到って上記三者に挨拶すると、バラモンも喜んで彼を迎え何事につけ客人の為にしたい旨を申し出る。すると王は「自分は王族であり、汝はバラモンであるから、与えるのは自分の側である、何でも欲する所を言え」と答える（38）。これに対してバラモンは、「バラモンといっても、二種類（*dvi-vidhā*）存在する。「受ける者」（*pravṛtta*）と「与える者」（*nivṛtta*）と（39）。自分は「与えるバラモン」であるから、他人から物を貰うのを潔しとしない、就いては、余は我が *tapas* の力によって何物かを進ぜようと訴える。王は「自分は Kṣatriya であるから、嘗て『下さい』（*dehi*）という言葉を知らない、「下さい」と言うのは「戦を与えよ＝掛かって来い（*prayaccha yuddham*）」と言う時のみ」と自分の主張を譲らない[14]。ここでバラモンとクシャトリヤの戦いとなるが、言葉を武器とする前者と、腕力を武器とする後者では、前者の呪力（*śāpa*）が勝る道理であるので、武人は折れてバラモンの提案を受け入れて、称名の功徳を受けると言う。

yat tad varṣa-śataṃ pūrṇaṃ japyaṃ vai japatātvayā
phalaṃ prāptaṃ tat prayaccha mama ditsur bhavān yadi（*47*）
貴方がどうしても与えずには已まないとあれば、
貴方が満百年の間、唱名を続けて到達した果を、私に下さい。
若し汝がどうしても与えると言うなら、それを私に与え給え。

斯くバラモンは譲歩して出掛けようとするが、その前に「でもその果実たるや如何なるものか（*kiṃ ca tasya phalaṃ vada*（50d））」と訊ねると、バラモンは答えて言う。

phala-prāptiṃ na jānāmi dattaṃ yaj japitaṃ mayā
ayaṃ dharmaśca kālaśca yamo mṛtyuśca sākṣiṇaḥ（*51*）
余が唱名して、（汝に）与えた果実の到達（がどのようなものか）を私は知らない。
（これについては）Dharma, Kāla, Yama, Mṛtyu が証人である。

「自分の知らないものを与えた」と言ったバラモンに対して、王は憤慨して言う。

ajñātam asya dharmasya phalaṃ me kiṃ kariṣyati
prāpnotu tat phalaṃ vipro nāham icche sasaṃśayam（*52*）
（汝自身が）知らない善行（*dharma*）の果実など、一体私にとって何の役に立つのか。
バラモンがその果実を受けたらよい。私は疑わしきものなど欲しくないから。

にも拘らずバラモンははっきりと言う。

nādade 'para-vaktavyaṃ dattaṃ vācāphalaṃ mayā
vākyaṃ pramāṇaṃ rājarṣe mamāpi tava caiva hi（*53*）
nābhisaṃdhir mayājapye kṛta-pūrvaḥ kathaṃ cana
japyasya rāja-śārdūla kathaṃ jñāsyāmy ahaṃ phalam（*54*）
余は（汝が）これ以上何と言っても受付けない。余は言葉（＝唱名）の果を（汝に）与えた。
王仙よ、言語表出（*vākya*）は余にとっても、汝にとっても常に真実として権威を保つから。
（併し）余は唱名行為に於いて、嘗て一度なりとも特定目的（*abhisaṃdhi*）を持った試しがなし。
虎の如き王や、唱名行為（*japya*）の果など、如何して私が知（り得）るであろうか。(54)

その果報が如何なるものか、「特定な目的意識（*abhisaṃdhi*）」を持たずに只管実践される「無私の唱名」がここに物語られるが、この行為は、Bhagavadgītā に見える、有名な *nirahaṃkāra* の思想を想起せしめるものがある。そして物語は更に続くが、我々の当面の問題を離れるので、ここではこれ以上は深くは立ち入らない。

この物語において Kāla, Mṛtyu, Yama の三者は恰も三位一体（*tritaya*: 28）の如くに述べられているが、彼等は後に Kāla, Dharma, Mṛtyu となって現れる（115）。併し、既に見た様に Dharma は三者に先立って登場しているから、物語は些か混乱してはいるが、Yama はしばしば Dharma に置き換えられる場合がある。

唯、ここで注目すべきは、この物語に於いて、Dharma は Kāla, Mṛtyu, Yama の三者に先行して登場し、バラモンに「無余涅槃」を勧めるが、彼は「有余涅槃」に固執して、Dharma の提案は断固拒否され、バラモンの前に Dharma は顔色なしの事態を現出している。のみならず、Dharma, Kāla, Yama, Mṛtyu の四人は 51 に於いては、バラモンによって適当に利用され、証人の役を演じる事となった。というのもこのバラモンは、偶々来合せた Ikṣuvāku 王と激しい口論を始めるが、王に攻寄られるに及んでバラモンは、「証人」としてこの四者を呼び寄せている。「無私の宗教的行為」の実践者の前で、四人の神々は余りにも影が薄くなってしまった[15]。ここに至って Dharma は完全に己が権威を失墜し、純粋な修行者を前にしては全く歯の立たない存在と化してしまった。

（3-3）MBh.5.126

Dharma が他者の下位に甘んじて、それに従属している例も見られる。

Kṛṣṇa が、Duryodhana に対して、罪もない従兄弟の Pāṇḍu の五王子と争う非を説いて、寧ろ従兄弟同士「和解すべし」を忠告した時、Duryodhana はそれを無視して怒って出て行ってしまった。それを見て慨嘆していた一族の長老 Bhīṣma と Droṇa 等に向かって Kṛṣṇa は、有名な諺を引く。

tyajet kulārthe puruṣaṃ grāmasyārthe kulaṃ tyajet
grāmaṃ janapadasyārthe ātmārthe pṛthivīṃ tyajet（*MBh. 12.126.48=2.55.10, 5.37.16, 5.126.49=/=1.107.32*）
一族の為に一人の男を、村の為に一族を、国土の為に村を、自分の為に大地を棄つべし。

「一族全体を救う為なら、寧ろ Duryodhana 一人を排除すべきである」と提言し、自分が以前 Kaṃsa を誅した故事に言及する。

老王 Bhoja（= Ugrasena）は、存命中に怒った息子 Kaṃsa に王位を奪われた。親を虐待した彼は当然の事として親族に棄てられた。そこで余は、親族の為に彼を誅罰し、Ugrasena を再度王位に即け、Bhoja 一族の繁栄の礎を築いた。同様に造物主 Prajāpati もアスラを成敗したと言われる。

vyūḍhe devāsure yuddhe 'bhyudyāteṣv āyudheṣu ca（*40*）
dvaidhī-bhūteṣu lokeṣu vinaśyatsu ca bhārata
abravīt sṛṣṭimān devo bhagavāṃl loka-bhāvanaḥ（*41*）
parābhaviṣyanty asurādaiteyādānavaiḥ saha
ādityāvasavo rudrābhaviṣyanti divaukasaḥ（*42*）
devāsura-manuṣyāśca gandharvoraga-rākṣasāḥ
asmin yuddhe susaṃyatāhaniṣyanti parasparam（*43*）
iti matvābravīd dharmaṃ parameṣṭhīprajāpatiḥ
varuṇāya prayacchaitān baddhvādaiteya-dānavān（*44*）
evam uktas tato dharmo niyogāt parameṣṭhinaḥ
varuṇāya dadau sarvān baddhvādaiteya-dānavān（*45*）
tān baddhvādharma-pāśaiśca svaiśca pāśair jaleśvaraḥ
varuṇaḥ sāgare yatto nityaṃ rakṣati dānavān（*MBh.5.126.46*）
武器を掲げて、神々とアスラが隊を整え、両軍対峙して（40cd）、世界が真っ二つに分かれ、
将に滅亡せんとした時、世界の福祉を進め賜う創造神は自ら宣うた。（41）
「Diti の後裔である、諸々のアスラ達は、Danu の後裔達と共に敗退せん。
一方、Aditi の後裔、Vasu の後裔、Rudra 達は天の住人とならん」と。（42）
「神々、アスラ、人間，ガンダルヴァ、蛇、羅刹達も、
この戦いに於いて激しく互いに殺し合うであろう」（43）
とこの様に考えて、最高神 Prajāpati は、Dharma に向かって次の様に言った。
「これらの Diti と Danu の後裔を全員縛り上げて、水天（Varuṇa）に引渡せ」と。（44）
斯く言われた Dharma は、最高神の命により（*niyoga*）、
彼等 Diti と Danu の後裔を全員縛り上げて、水天に引渡した。（45）
水天は、Dharma の縄で縛られた者を、更に自分の縄で縛った。
爾来、Varuṇa は常に彼等 Danu の後裔を、心して海中に見張っているのである。（46）

この物語に在って、Dharma は既に自分の個性を失い、唯単に造物主の命令を忠実に励行している使徒に過ぎないものとなっている。

（3-4）MBh.8.66

更に次の文章に在っては、Dharma は武人の非難の対象となった。名将 Karṇa の最期を物語る悲劇の場面に於いて、彼はダルマを激しく非難した。

周知の通り、Karṇa は Kuntī が婚前に太陽神と交わって得た男子であったから、Pāṇḍava 五王子とは兄弟の仲であったが、風評を怖れた未婚の母は彼を Aśvā 川に棄てた。後 Sūta Adhiratha とその妻 Rāghā に育てられ、長じて Duryodhana の厚遇を受け、彼への義理から大戦争では彼の軍に加わった。先立って彼は Bhṛgu 族に属するバラモンと身分を偽って、バラモン Paraśurāma の許にあり、師より Brahmāstra の秘儀を受けた。併し、師は彼が Kṣatriya である事実を見破って、師を欺いた非を咎め、「折角修得したこの武器（の使用法）も、必要時には役に立つまい」と言って彼を呪った。

果たして彼がアルジュナと合戦中に、己が戦車が大地にめり込んで動かなくなった。彼は戦車を引き上げる間、暫しの休戦をアルジュナに乞う。両者の一騎打ちは MBh.8.66-7 の間に語られるが、関連章句のみ以下に引用して私訳を試みる。

kālo hy adṛśyo nṛpa vipra-śāpān nidarśayan karṇa-vadhaṃ bruvāṇaḥ
bhūmis tu cakraṃ grasatīty avocat karṇasya tasmin vadha-kāle 'bhyupete（*1122**）
brāhmaṃ mahāstraṃ manasi pranaṣṭaṃ yad bhāargavo 'py asya dadau mahāatmā
vāmaṃ cakraṃ grasate medinīsma prāpte tasmin vadha-kāle nṛ-vīra
tato ratho ghūrṇitavān narendra śāpād tadābrāhmaṇa-sattamasya（*1123**）
na cāsya ghoraṃ pratibhāti cāstraṃ yad bhāgavo hy abhyavadan mahātmā
tato ratho bhārata ghūrṇate sma śāpāt tadābrāhmaṇa-sattamasya
prāptaṃ vadhaṃ śaṃsati cāpy athāstraṃ praṇaśyamānaṃ dvija-mukhya-śāpāt（*1124**）
王よ、Kāla（時間、運命の神）は（己が）姿を見せぬまま、バラモンの呪詛ある故に、
Karṇa の死を暗示しつつ、「大地が車輪を呑む」と言った。Karṇa の死が既に近づいていたので。（1122*）
気高き Bhṛgu の後裔が彼に授けた、偉大なる梵天矢（の使用法）も彼の心から消えてしまっていた。
果して死期到来時に、大地は左の車輪を呑んだ。すると戦車は転がり出した。偉大なバラモンの呪詛の故に。（1123*）
気高きバラモンが授け給うた、怖ろしい矢（の使用法）も彼の頭に閃かなかった。
優れたバラモンの呪詛により、その時戦車は転がり始めた。
まさにこの滅び行く武器もまた、優れた再生族の呪いから、（彼の）死期当来を告げていたのである。（1124*）

tataścakram apatat tasya bhūmau sa vihvalaḥ samare sūta-putraḥ
ghūṛne rathe brāhmaṇasyābhiśāpād rāmād upātte 'pratibhāti cāstre（*42*）
amṛṣyamāṇo vyasanāni tāni hastau vidhunvan sa vigarhamāṇaḥ
dharma-pradhānān abhipāti dharma ity abruvan dharma-vidaḥ sadaiva
（*vayaṃ ca nityaṃ prayatāma dharmaṃ cartuṃ yathā-śakti yathā-śrutam*）（*1127**）
mamāpi nimno 'dya na pāti bhaktān manye na nityaṃ paripāti dharmaḥ（*43*）
evaṃ bruvann praskhalitāśva-sūto vicālyamāno 'rjuna-śastra-pātaiḥ
marmābhighātāc chalitaḥ kriyāsu punaḥ punar dharmam agarhad ājau（*MBh.8.66.44*）

すると、彼の車輪が大地に落ちてしまった。Karṇa は戦場に在って当惑した。
戦車は転がり出した時、バラモンの呪詛によって Rāma から授かった筈の矢も（彼の）頭に浮かばなかった。(42)
これら（思い掛けなかった）諸災厄に我慢ならず、両手を振り動かしながら、我と我が身を罵りつつ、
「ダルマを旨としている者を、ダルマは常に守る」と、ダルマの知者は何時も言っていた、
[我々は常にダルマを、可能な限り、又伝統に従って、実践している。(1127*)]
併し余の場合、この窪地は余を守ろうとしない。思うにダルマは常に必ずしもその信者を守るとは限らない」。(43)
この様に言いながら、よろめく馬と御者共々、アルジュナの放つ矢継ぎ早の矢に悩乱されつつ
急所を討たれて、行動もままならず、彼は再度三度、戦場でダルマを責めた。(44)

斯かる不利な状況の下に在っても、Karṇa は神的武器を用いて尚、Arjuna と Kṛṣṇa の両者と勇敢に対峙した。

raudram astraṃ samādāya kṣeptu-kāmaḥ kirīṭavān
tato 'grasan mahīcakraṃ rādheyasya mahāmṛdhe（*59*）
grasta-cakras tu rādheyaḥ kopād aśrūṇy avartayat
so 'bravīd arjunaṃ cāpi muhūrtaṃ kṣama pāṇḍava（*60*）
madhye cakram avagrastaṃ dṛṣṭva daivād idaṃ mama
pārtha kā-puruṣācīrṇam abhisaṃdhiṃ vivarjaya（*61*）
prakīrṇa-keśe vimukhe brāhmaṇe ca kṛtāñjalau
śaraṇāgate nyasta-śastre tathāvyasana-ge 'rjuna（*62*）
abāṇe bhraṣṭa-kavace bhraṣṭa-bhagnāyudhe tathā
na śarāḥ praharnty ājau na rājñe pārthivās tathā
tvaṃ ca śūro 'si kaunteya tasmāt kṣama muhūrtakam（*63*）
yāvac cakram idaṃ bhūmer uddharāmi dhanaṃjaya
na māṃ ratha-stho bhūmi-ṣṭham asajjaṃ hantum arhasi
na vāsudevāt tvatto vāpāṇḍaveya bibhemy aham（*64*）
tvaṃ hi kṣatriya-dāyādo mahā-kula-vivardhanaḥ
smṛtvādharmopadeśaṃ tvaṃ muhūrtaṃ kṣama pāṇḍava ca（*MBh.8.66.65*）
王冠をつけた Arjuna が、Rudra 矢を番えて射ようとした時、
大事な戦いの最中に、大地は Karṇa の一方の車輪を呑み込んだ。(59)
車輪を呑まれた Karṇa は、怒りの余り涙を流した。
そして Arjuna に向かって「Pāṇḍu の後裔よ、暫し猶予を。(60)
今、偶々余の車輪が、地中に埋没したのを見て、Pṛthā 夫人の子よ、
何とぞ、卑怯な連中の抱く様な、卑劣な思いを抱き給うな。(61)
髪を乱した者、（戦場から）背を向ける者、バラモン、合掌
（して命乞い）する者、降参した者、武器を棄てた者、困窮者、(62)
矢の尽きた者、鎧を奪われた者、武器を奪われ毀された者、
（以上十種の敵）王には、王たる者は戦場で矢を放たない。

Kuntī 夫人の子よ、汝は英雄である。されば今暫し、猶予し給え。(63)
余が、この車輪を大地から引き上げる間、Dhanaṃjaya よ、
どうか戦車の上から、地上に在る余を討ち給う事勿れ。
Pāṇḍu の後裔よ、余はもと Vasudeva の息子（Kṛṣṇa）も、汝も怖れる者ではない。(64)
汝は武家の出身、名門の育ちである。ダルマの教えを想起して、暫し猶予し給え。(65)

思わぬ事故に遭遇して、自分が戦車を修復するまで、暫し猶予し給えと、武士の情け、武士道に則り、合戦のルールに訴えて、アルジュナに懇情したが、これに対しクリシュナは戦車の上から、彼の言を無視し、更に皮肉を籠めて次の様に言う。

rādheya diṣṭyāsmarasīha dharmam
prāyeṇānīcāvyasaneṣu magnā
nindanati daivaṃ kukṛtaṃ na tat tat（*MBh.8.67.1*）
Rādhā の子よ、幸なる哉、汝がダルマをここで思い出したとは。
概して、卑しい輩という者は不幸に陥ると、（己が）悪行を棚に上げて運命を難じる。

そして彼は Karṇa の旧悪を暴いては、「その時、汝のダルマは何処へ行ってしまったのか（*kva te dharmas tadāgata*: 3-5）」と問い詰める。Kṛṣṇa は更に Arjuna を励まして、不利な立場にあっても構わないから、今は Karṇa に容赦なく鋭い矢を浴びせる様命じ、ここに Karṇa は遂に絶命した。

叙事詩の英雄はダルマを旨として生きてきた積りであったから、不慮の禍に遭遇しても当然ダルマが彼を守護すると信じていたが、この期に至って彼は遂に愚痴っぽくダルマを非難した。併し、彼は「そう潔癖には言われますまい」と、Kṛṣṇa によって窘められて、不利の状況下に命を落した。

(4) 結論

以上我々は、Dharma 擬人化の用例 13 を集めて提示し、その一々に亘って分析、検討したが、最後にこれらを回顧展望して、本稿の結論とする。

Dharma は、時に変装して動物の姿をとり（鳩、ナクラ、犬、カラス、鹿）、又時に半神の妖怪（夜叉）となり、時にバラモンの姿を取り、更には自分の姿のままで姿を顕している。一面に於いて Dharma は己が権威を保って人間を試す（*jijñāsu*）役割を演じているが、反面彼には幾つかの弱点のある事も明らかである。彼は無私の唱名に専心するバラモン（*jāpaka*）によって再三「去れ」と脅されるままに退散する。又時に創造神の召使としてそのメッセージを伝える役に甘んじている。更に羅刹の猛威に怯えてはカラスに変身する。その弱味は一体何処に淵源するであろうか、最後に我々はこの問題を検討するであろう。

今から約半世紀前、ドイツの碩学 P. Hacker は “Dharma im Hinduismus” と題する論稿を発表し、Dharma に実行前、実行過程、実行後に三相のある事を確認した[16]。実行前にそれは「道徳律」として現前するが、それは又 *car-, kṛ-* 等の動詞の対格に立って実践の対象となり（実践過程）、「良い行い一般」を意味している。そして実行後は「良い行い」の結果として「功徳」の形を取り、しばしば「実体的」に表象されるが、それは飽くまでヒンヅー教に在って「倫理道徳」の概念として死後の「生天」を約す

るものであった[17]。

他面それは、この「生天倫理」を超越して、「解脱涅槃」を目指す純粋な宗教家の前には、無力の存在と化す場合がある。それは我々が無私無欲な「唱名朗詠者（*jāpaka*）」の物語に見た如くである。道徳と宗教が相携えて「両立」している限り、Dharma はその権威を保ち、存在意義を堅持しているが、宗教が道徳を超越する部分に在っては、自ずからその限界が看守される如くである。

それは「勧善懲悪」の世俗の倫理概念であっても、善悪の彼岸に位する「解脱涅槃の宗教的概念」とは隔たる事遥かに遠い。無私の献身行を旨とする行者にとっては、彼は「無縁の存在」であった。その種の人々に対してはダルマの忠告は通用しない。その限界と弱点は又、残余の物語にも見られる所であった。

Abbreviations and Bibliography

KSS. ：Kathāsaritsāgara by Somadevabhaṭṭa Nirnaya Sagar Press（Bombay 1939）.

MBh. ：The Mahābhārata, The Poona Critical Edition（Bhandarkar Oriental Institute）.

R. ：The Vālmīki Rāmāyaṇa, The Baroda Critical Edition（Orienal Institute, Baroda）.

Hara, M.

1968 ：「Kṣatra-dharma －古代インドの武士道－」,『東洋学報』51（2-4）1968, pp.304-271, 456-420.

1992 ：“Śraddhā in the Sense of Desire,” *Asiatische Studien*（Bern 1992）, Festschrifte J. May pp.180-194.

1996 ：“Ānṛya,” *Langue, style et structure dans le monde indien: centenaire de Louis Renou*, ed. par N. Balbir et G.L.Pinault（Paris 1996）, pp.235-261.

1996 ：“*Ānṛśaṃs*（*y*）*a,*”『勝呂信静博士古稀記念論文集』（山喜房仏書林 1996）pp.141-155.

2001 ：“Hindu Concepts of Anger: *manyu* and *krodha*,” *Festschrift R. Gnoli*, Seie orientale Roma XCII 1（Roma 2001）, pp. 419-444.

2010 ：“A Note on Bhūmi-sparśa-mudrā,” *Festschrift D. Schlingloff*, ed., by E.Franco and M.Zin（Lumbini 2010）, pp. 345-364.

Hopkins, E.W. ：*Epic Mythology*, Grundriss der indo-arischen Philologie und Altertumskunde III.I.B,（Strassburg 1915）.

Wezler, A. ：*Die wahren ‘Speiseresteesser’*（*Skt. vighasāśin*）, Akademie der Wissenschaften und der Literatur, [Mainz]. Abh. der Geistes-und Sozialwissenschaftlichen Kl., Jg. 1978, Nr. 5,（Mainz 1978）.

脚注

1 筆者もこれまで幾つかの論稿を発表した。“*Dharmasya sūkṣmāgatiḥ*”（*Festschrift W.Halbfass*: Poznan 1997）, “A Note on the phrase *kurukṣetre dharmakṣetre*”, *Journal of Indian Philosophy* 27, 1999, “*tapas, dharma, puṇya = sukṛta*”, *Festschrift A. Hirakawa*: Tokyo 1975.

2 H.W.Hopkins, *Epic Mythology*, 57-8.

3 *śyena uvāca*
indro 'ham asmi dharma-jña kapoto havyavāḍ ayam
jijñāsamānau dharme tvāṃ yajñavāṭam upāgatau（*MBh.3.131.28*）

4 Cf. 原、「地獄に留まろうとする王様の物語」『東方』第 8 号、1992 年。

5 Cf. Hara, “Ānṛśaṃs（y）a,” Festschrift Suguro 1996.

6 *gṛha-sthaścāvajeṣyāmi mṛtyum ity eva sa prabho*

pratijñām akarod dhīmān dīpta-tejāviśāṃ pate（*40*）

7 *jigīṣa māṇaṃ tu gṛhe tadāmṛtyuḥ sudarśanam*
pṛṣṭhato 'nvagamad rājan randhrānveṣītadāsadā（*47*）

8 Cf. Hara, “Hindu Concept of Anger : *krodha* and *manyu*,” *Festschrift R. Gnoli*.

9 Cf. Hara, *Festschrift D. Schlingloff*.

10 Cf. A.Wezler, *Die wahren ‘Speiseresteesser’*（*Skt. vighasāśin*）.

11 Cf. also MBh.3.176.16, 177,11, 13.109.42, 14.56.3, 5, 18, 14.93.48.

12 For *śraddhā* cf. Hara, *Festschrift J.May.*

13 For the word *śraddhā*, cf. Hara 1992.

14 武人の「不受の誓」については、原、1968 p.284.

15 その他、Mṛtyu が Kāla, Yama, Dharma と共に顕われる例は次の如くである。
Nārada は Yama の殿堂を記述しながら、そこに侍る者達を述べる。
agastyo 'tha mataṅgaśca kālo mṛtyus tathaiva ca
yajvānāścaiva siddhāśca ye ca yoga-śarīriṇaḥ（*MBh.2.8.26*）
Agastya, Mataṅga, 更に時間、死、祭式執行者、成就者、Yoga を身体と為す者達。

Janamejaya は Skanda の総指揮官任命式を描きながら、そこへの参列者を述べる中で。
dharmaśca bhagavān devaḥ samājagmur hi saṃgatāḥ
kālo yamaśca mṛtyuśca yamasyānucarāśca ye（*MBh.9.44.15*）
聖王である法、時間，Yama 、死、Yama の従者達もそこにやって来た。

16 P. Hacker, *Kleine Schriften*（Wiesbaden 1978）herausgegeben von L. Schmithausen, pp.496-509.

17 筆者は嘗て *tapas* についても、同類の三分類を試みた事がある。即ち *tapas* は実行前「苦行」として現前するが、同類の動詞の対格に立って実践の対象となり（実践過程）、そして実行後は激しい苦行の結果として「神通力」となった。

RINDAS 伝統思想シリーズは、人間文化研究機構現代インド地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構（NIHU）http://www.nihu.jp/sougou/areastudies/index.html
NIHU プログラム現代インド地域研究（INDAS）http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/
龍谷大学現代インド研究センター（RINDAS）http://rindas.ryukoku.ac.jp/

RINDAS 伝統思想シリーズ 4
Dharma, the Personified
原　実

2011 年 8 月 31 日発行　非売品

発行　龍谷大学現代インド研究センター
〒 600-8268　京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1
龍谷大学白亜館 3 階
TEL：075-343-3809　FAX：075-343-3810
http://rindas.ryukoku.ac.jp/

印刷　株式会社　田中プリント
〒 600-8047　京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町 677-2
TEL：075-343-0006

ISBN 978－4－903625－47－8

ISBN 978-4-903625-47-8